



道

求

第貳號

第拾壹卷

求道第拾壹卷第貳號目次

求道

◎利他眞實の信心

講話

◎忍終不悔

近角常觀

一、忍終不悔の文——二、歎異抄三章と忍終不悔の文——三、難度海の人生——四、造る瀬無きみ心は——五、聖人が確信の本源——六、地獄に落ちたりとも更に後悔すべからずの文——七、聖人の常の仰せにば——八、東方偈——九、そこはくの樂をもちける身にてありけるを——一〇、狂亂所爲多きが如し——一一、人生で一帯心のらくな——一二、汝は是れ凡夫なり——一三、煩惱の所爲なり——一四、五劫思惟の願をくく案ずれば——一五、五劫の思惟、永劫の修行——一六、阿彌陀佛と諸佛との關係——一七、十方諸佛と善巧攝化——一八、聖人の自誓

雜錄

◎人生と信仰

吉田藤吉

◎お慈悲のたゞ仲に

在米 長島清太郎

告白

◎求道學舎、第二求道會講話概況

毎日曜午前九時

求道學舎

〔本郷區森川町一丁目〕

毎土曜午後二時

第二求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三求道會

〔日本橋區板橋町説教所〕

求道

第拾壹卷
第貳號

利他眞實の信心

○我等は不清淨である、不眞實である、而して如來は清淨である、眞實である、而して最も干要なることは我等の不清淨不眞實と如來の清淨眞實との關係である。

○世上に於ても彼人は眞實なりといふときは、單に其人が虚言を云はぬ、不實を爲さぬといふだけの意味と考へ安い、されど絶對の眞實といふことは、不眞實なる人に對して、飽まで其不實を見捨てずして、却て不實を憐れむがゆへに如何に不實なるものも、終には其不實を慚愧して、眞實となるまで、眞實を爲し遂げる人を名けて眞實なる人といふのである。

○不實不淨なる衆生を飽まで見捨てたまはざる、如來の清淨眞實に腹ふくれて、如何な不實な我等も終にはあやまりはつるまで見捨て、下さらぬ、御眞實が即ち如來の眞實である、之を利他廻向の眞實といふのである、此の如き眞實に出遇ふたるときは如何なる不實なるものも、疑へるものも、又隔心を

持ちたるものも、偽れるものも、飽まで疑うて下さらぬゆへ、飽まで隔て下さらぬため、遂に疑ふことも出來ず、隔てることも出來ず、信ぜざるを得ず、眞實ならざるを得ざるやうになるのである、是が即ち利他眞實の信心である。

○言ひ換ゆれば、我等の不眞實と如來の眞實と出違ひにならぬ様にいたゞかねばならぬ、たとへば私が某甲なる友人に對して不實なる考を持つて居る、不信なる行動を爲しつゝある、隔心を抱て居る、然るに某甲なる友人は頗る、單純なる人である、氣の回らはぬ人である、私の不實に氣も附かぬのである、而して眞面目に我を信じ、我に對して實意であるとする、此の如き場合に於ては、確に私の不眞實と友人の眞實とは出違ひになつてある、何んとなれば、友人は私の不實なるを知らずして眞實を爲しつゝあるのである、私は友人の眞實を知りながら猶不實を續けつゝあるのである、友人の眞實と私の不實の間が全く無交渉である。

○故に若し眞實なる友人も私の不實を知らば、あきれ果て、其眞實も續かぬかも知れぬのである、若し其眞實を續けてくれたところで、私の不實の申譯がないのである、故に結局横着になりて如何に不實でも見捨てゝくれぬものと安心するか

如何に眞實にしてくれても、私の不實が濟まぬと氣兼ねをするか、二者其一に居らねばならぬのである。

○しかるに如來の清淨眞實は出達の眞實ではない、私の不清淨不眞實を知らぬ眞實ではない、第一に私の不清淨不眞實を知り抜いて下さるのである、そして普通ならば不清淨不眞實なるものに對して、あされはてゝ見捨ててゐるがあたりまへなるに、如來は私の不清淨不眞實なる點が特に悲憫すべきものと思召して、其不實ものが見捨てられぬと踏み止まりて下されたのが即ち超世の悲願である、絶對の慈悲である、大悲大願と言はるゝ點が是である、信卷の至心釋が全く是である、是が何時でも繰返す點である、而して歎異鈔に、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなればとあるが即ち是である。煩惱具足の凡夫は何れの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、ひとへに惡人成佛の爲なればとあるも即ち是である。

○人生問題に於ても此點が實に方向轉換の樞軸である、相對界の人生に於て我等が善を爲せば可い、惡を爲せば不可い、又人に對して疑はねば先方も疑はぬ、隔てねば先方も隔てぬのである、しかるに如何せん其爲すべき善が出来ぬ、爲して

はならぬ惡が止まぬ、疑を止めたいと思へども止まず、隔心を取り去りたいと思へども、取り去ることが出来ぬ、是實に

二河白道の譬喩に行くも死せん、止まるも死せん、返るも亦死せん、一として死を免れずといふ心相である、畢竟するに疑はねば可い、隔てねば可い、信ずれば可い、たのめば可いされど、信ずることが出来ぬ、たのむことが出来ぬといふことになるのである、此の如き場合に於て唯一言である、けれども、其信ぜられぬも尤である、疑へるも無理はない、隔てるも、眞實に出来ぬのも、如何にも無理ならぬことである、と、相對界の五分五分で行きつまりて居るところを憐愍して下されて、初めて五分五分已上の大悲を起して下されたのが、抑々超世無上の本願たる點である、諸佛のたすけられぬものをたすけんと弘誓である、たすからぬものをたすけたまふのである、難度海を度するといふも、無明の闇を破るといふも實に是である。

○私なども人生問題に於て、五分五分の世の中に此方より疑はねば可い、隔てねば可い、争はねば可いとは思へども如何せん、疑も、隔ても、争も止めることが出来ぬ、其點を察して當然ならば夫ては不可いといふべきを、私の性分を十分御承

知下さるものゆへ、如何にも止めることの出来ぬのが尤である、可愛相である、無理からぬことゝ察して下さるのである、そこで疑ふ私を飽まで疑はず、隔てる私に飽まで隔てず、争ふ私に飽まで譲りて下さるのである、而して飽まで飽まで貪戻極まりなき私に、飽かしむるまで譲り與へて下さる大悲なるがゆへに、如何に貪欲極まりなき私も如來の無貪清淨の御心に負けて仕舞ふたのである、如何なる貪戻なる我等もあやまりはてゝ大満足をするのである、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなしとあるが是である、一たび光照かふるもの、業垢をのぞき解脱を得とあるが即是である、過去未來現在三世の業障一時につみきえてとあるが是である、聖人が横超斷四流を釋して、斷と言ふは、往相の一心を發起すれば生として受くべきの生なく、趣として更に到るべきの趣なし、已に六趣四生の因亡し、果滅す、故に即ち頓に三有生死を斷絶す、故に斷といふ也と仰せられたが是である、私が常に言ふ如く疑心がなくなり、隔心がなくなるといふが是である。

○こゝに大に注意すべき點がある、疑の止まぬのが可愛相じや、信ぜられぬが尤じや、不實な點が見捨てられぬとさいたとさ、嗚呼難有いと一念感泣するのである、何んとなれば、今

まで隔てを止めねばならぬ、是非善くせねばならぬと思ふて居たるに、其行きとまりて居る點を察して下されたものゆへ、たしかに方向轉換をしたのである、されど動もすれば、隔ての止まぬのが可愛相であると承りただけて、いつまでも隔か止まぬのである、疑が止まぬのである、といふときは所謂疑ながらの往生といふ様なことを言ひ出すやうになるのである、我等五分五分の人間が疑や隔の止まぬは可愛相じやと憐みたまふ已上は其疑ふ私を疑はず、隔てる私に飽まで隔てを取り、向ふて下さるのである、そこで如何な疑深き私も疑が去り隔心の多き私も隔心がなくなるのである、そこで疑ひはれて一心一向に後生たすけたまへとたのむといふことがあらはれて来るのである。

○佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたとなれば、他力の悲願はかくのごとき、われらがためなりけりととらされて、いよいよたのしくおぼゆるなりとか、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なりとか、之につけてこそいよゝゝ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存し候へとか、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとつに親戀一人がためなりけり、さればそゝはく、の業をもちける身に

て、ありけるを、たすけんとおぼしめした、ちける本願のかたじけなさよとあるが、此御眞實に満足したる有様である、否満足せしめずば止まぬといふ御眞實である、信樂釋に如來の満足大悲圓融無碍の信心海なり、是故に疑蓋間離あることなし、故に信樂と名く、即ち利他廻向の至心を以て信樂の體と爲る也とあるが實に是である。

○利他廻向とか、利他眞實の信心とかいふ御言が一入難有い、特に利他といふ御言が實に意味深長である、昔より他利利他の深義といふとにつきて、色々と解釋を試みて、其深義の深義たる點を味はんと企てつゝある、されど、一向深義といふ程の味があらはれ來らぬのである、私共の不實の點を憐みて、其不實が見捨てられぬといふ眞實を以て、飽まで不實なる私を利して下さるのである、即疑ふ私を憐みて飽まで疑ふて下さらぬのである、隔てゝ下さらぬのである、疑のとれるまで、隔てゝ下さらぬ、憐みて下さる、恵みて下さるのである、即佛より飽まで私を利して下さるのである、不實なる私を見捨てぬ眞實を加へて下さるのである、是實に利他といふ御言でなければならぬ、他利といふ言は衆生より佛に向ふたる

まへり、是を利他眞實の信心と名くと仰せられた、如何にも利他眞實の信心といふ御言が難有い、即ち不實なる我等を見すてられぬといふ御眞實を、私の上に飽まで加へて下さるために、遂に其御眞實に満足して疑も止み、隔ても取られ、御慈悲を信ぜざるを得ぬ様になつたのが即利他眞實の信心である。

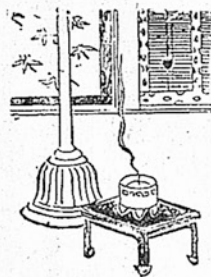
○和讃に曰く、盡十方の無碍光佛、一心に歸命するをこそ、天親論主のみことには、願作佛心とのべたまへ、願作佛の心はこれ、度衆生のこゝろなり、度衆生の心はこれ、利他眞實の信心なり、又曰く、淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、すなはち願作佛心を、度衆生心となづけたり、度衆生心といふことは、彌陀智願の廻向なり、廻向の信樂うるひとは、大般涅槃をさとするなりと、願作佛心とは如來の設我得佛と願ひたまへる本願である、度衆生心といふは、若不生不取正覺と誓ひたまへる大悲である、其如來の願作佛心、度衆生心の儘が我等に届いて下されたが、即ち利他眞實の信心である、彌陀廻向の信樂である。

45
○我等信仰の力が俗諦門の上に實現し來るのは、此如來廻向の眞實心の發現である。此點に於ては實に不可稱不可説不可思議の力があらはれて下さるのである、現生十種の益も現世、

言である、されど利他といふ言は飽まで見捨てゝ下さらぬ佛力をあらはす御言が利他である、而も廻向といふ御言が難有い、私共の疑の止まぬ點、隔心の止まぬ點を察して下されて、其點を可愛相と思召して、其隔心の止むまで御身より隔てたまはぬ御心を向けたまふのである、聖人が至心釋に廻向利益他の眞實心なり、是を至心と名くと仰せられたが是である。

○我等が不實が可哀相なりと思召して、夫を見捨てられぬ御眞實より、如何なる不實なる私も頭が下りて大満足するまで御見捨なき御眞實である、聖人の釋に、如來の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまへり、則是利他の眞心を彰す、故に疑蓋難ふることなし、とある、疑蓋無難とあるは如何にも疑も隔てもなくなつた心持である、特に蓋の字の左訓に煩惱とある、疑も煩惱もなくなつて、如何にも満足圓融の心持である、遂にかくなるまで如來より疑はず、隔てなくして下さるのである、正しく如來菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋難ふることなきに由て也、斯心は即如來の大悲心なるが故に、必ず報土正定の因と成ると仰せられたのが是である、故にまた、如來苦惱の群生海を悲憫したまひて無碍廣大の淨信を以て、諸有海に廻施した

利益讃の數々も實に是である、されど一つ忘れてならぬことがある、これは如來の御眞實のあらはれてある、其御眞實は私の不實を憐みて下さる御眞實なれば、自分が眞實になつた様に考へてはならぬ、如來の御眞實といふは、私の不實を見捨てられぬといふ御眞實なれば其、御眞實をいたゞく私は、徹頭徹尾不實の私たることを忘れてはならぬ、歎異鈔の九章は、何時までも煩惱の止まぬにて、いよく御眞實をいたゞけよとの御教化である、又御文に無始已來つくりとつくる惡業煩惱を、願力不思議をもつて消滅するいはれあるがゆへに、とあるも是である、此身のあらんかぎり是不實の私である、煩惱の私である、されど、其不實の根を切り下さつたのである、煩惱の樹を伐りて下さつたのである、されど肉身のあらんかぎり、人生の水に活きつゝある間は、煩惱熾盛の花盛りである、煩惱興盛の青葉若葉は繁りつゝあるのである、實に慚愧の至である。



講 話

忍 終 不 悔

近 角 常 觀

一 忍 終 不 悔 の 文

『忍終不悔』は、「忍んで終に悔ひず」と讀む。御承知の如く『大無量壽經』の中に、法藏菩薩が世自在王佛の面前に出て、廣大なる本願を建て給ふ前に、「歎佛偈」と申して、世自在王佛を讃歎し給ふ偈が説かれてある。即ち「光顔巍巍として、威神極り無し、云々」とあるあの偈文にして、今しも佛が世自在王佛のみ許に、廣大なる本願を發起し給ふ際の御言葉故、甚深の思召を懇々のべさせ給ひたる偈文である。實は巢鴨監獄で教誨の時には、いつも此の偈を佛前で訓讀する事になつて居りますので、本年は此の三四日が同監初めての教誨日となり、私は其の時參つて此の偈を拜讀して、感じた儘を茲にお話致さうと思ふのである。此の偈の終りに、

幸くば佛、信明したまへ。是れ我が眞證なり。……

「願はくば佛、我が所願を照覽あれ。一切衆生を哀愍し、度脱することが是れ我が眞實の證である。」

願を發して彼を所欲を力精せん。……

「願を發して何處迄も自分は願ひ通り、遣り遂げやうと思ふ。」

ふ。

十方の世尊智慧無礙なり。常に此の尊をして我が心行を知らしめん。……

「智慧無礙なる十方佛に常に此の我が心及び行ひを知らしめ。」

假令身を諸の苦毒の中に止くとも、我行精進にして、忍びて終に悔いじ。

「設ひ此の衆生を助ける爲め、自身は諸の苦毒中に畢るとも、我が行は何處迄も精進にして、如何なる苦も苦とせず、忍んで他く迄も悔いと仕無い」と、茲に在る御言葉なのである。こは随分佛法に於ては「諸苦毒中忍終不悔」と申し、多くの佛の御苦勞を言ふ時に、常に用ゐる言葉であります。

二 『歎異鈔』二章と忍終不悔の文

そこで私が此の言葉の有難きに思ひ當つたといふは、私の心中に『歎異鈔』二章の御示しが、日頃より何となく此の御言葉に關連して頂かせて貰うて居たのである。御存知の如く二章のお言葉は、

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり。念佛は、まことに淨土にむするゝたねにてやはんべるらん。また地獄にあつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄にあたりともさらには後悔すべからずさふらん。

とあるお言葉にて、言葉づきは全く違ふのである。法藏菩薩

のは、「一切衆生を救ひ恵む爲めには、自分は如何なる苦勞難儀しても更に苦勞と思はぬ。設ひ其の爲め身を諸の苦毒の中に置くとも、後悔せぬ」と仰せ下されたお言葉にて。そこで今私が頂かせて貰ふと、親鸞聖人の今の二章の御示しは、丁度此の菩薩の仰せを直さく頂かれたる聖人の喜びの言葉となるのであります。

三 難度海の人生

こは今更ならねど、私共人生に於て佛のお慈悲を喜ぶといふは、人生に於て「らく」になり、愉快になり、楽しくなる、といふ事では無いのであります。此の世に於ては只今もお話し

の如く、自働車にひかれて死ぬる人もあれば、本年は新々早々駿河灣では愛鷹丸の沈没があり、又九州では櫻島の爆發が有つて多くの生命を失うた。日々新聞紙上之等不幸なる遭難

の人達の事を思ふと、氣の毒とも何とも言語に絶えたる慘狀であります。斯く人生の當てにならざる有様を我々眼前に見て居るが、人間は一面に於て横着冷淡、仕て見やうの無いもので、他方に於ては之等慘鼻の事柄を見るにつけ、忽ち夫れが自分の身の上でなかつたことを喜ぶ心がある。「マア自分て無つてよかつた」との思ひを、忽ちの中に皆な抱いて居るのである。去りながら私共、今茲では危難を免れ得たと言つて居るのであるけれども、親鸞聖人の『御本書』の初めには

竊に以れば難患の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。

とありて、斯く言ひ暮して居る我々の現在が、是れ難度海に浮沈しつゝある日暮してである。是れ、駿河灣で風浪激しく荒れ

て居る生活である。日頃頼みに仕て居る健康の船は、何時引

くりかへつて病氣に冒さるゝかも知れぬ。當てに仕て居る事柄のはたからはづれ来る出来事は、日常頻々として現はれるのである。斯く御同やう、人生は生死の海荒れ、煩惱の浪

逆立ち、一つとして思ふやうにならぬ。『和讃』には

濁世の起惡造罪は、暴風駛雨にことならず、

諸佛これらをあはれて、すゝめて淨土に歸せしめり。

我々の貪欲、瞋恚の群り起る様は、恰も暴風駛雨の荒るゝが如く、我と我が手て自分の心を計り知る事も出来ぬのである。況んや自由にて之を抑える事は無論出来ぬ。實に風荒れ、波狂ふ淺間しき様であります。

四 遣る瀬無き心は

爾るに其の煩惱の爲めに惱まされ、生死の海に浮き沈み、苦しんで居る様を御覽下さる佛の大慈の心は、即ち今の「幸くば佛信明し給へ、是れ我が眞證なり。……假令身を諸の苦毒の中に止くとも、我行精進にして、忍んで終に悔いじ」とある此の遣る瀬無き心である。たとひ如何程衆生の惱み苦み深くとも、他く迄之を救ひ助ける爲めに、長々其の惡しき心に善き心を以て向ひ、其の私の五分々々に對し、最後迄爭はざる思ひを以て見捨て給はぬ、其のあなたのお心は即ち「假令身を諸の苦毒の中に畢るとも、ひとたび願を發した上は、忍び悔ひぬとある、此の御心である。私共生死海中に惱んで居る者の、今聞く可きは實に此の佛のお心、思召である。此の仕て見やうなき私に向つて、斯く迄言つて下さる此の佛の御親切、是れ一つを頂かせて貰ふのである。之が即ち『歎異

鈔に、「唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし」とある。「唯念佛」の一つなのであります。

五 聖人が確信の本源

全體親鸞聖人が

「念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔す可ず候」

と言はれた聖人の信仰の、如何にも著しきは皆な人の知る處であるが、聖人がさう迄仰せられるには、然う言はさせる丈けのものがある。然う迄聖人を満足せしめる丈けのものがある。事を思はなければならぬのである。其大もとは今斯く生死の人生に浮沈して、永久に善くなれぬ私の心中を見そはす大悲のお心は、其の如何に淺間しく悩み深きをも捨てず、其者を哀れみ救ひ遂げるが爲めには、設ひ身を諸の苦毒の中に置くも悔ぬぬとある。此の大悲の御心である。此の私の悩み苦しみを底の底迄察知し、其私の悩み、苦しみを抜かんが爲に、私と苦を共にして、遂に私一人が爲め諸の苦毒の中に止つても後悔せぬとある。其の遣る瀬無きお心と聞く時は、我々如何に苦が有らうが淺間しからうが、私の其の苦、其の淺間しさの爲めに彌々大悲の涙を注ぎ、私が悪しければ惡しき程益々之を見捨て給はざる御まことである。すれば斯く迄私の淺間しさに、之を呆れも仕給はず、夫れが如何にも可哀相とある、如何にも廣大の思召と、これ一つを頂くと、即ち聖人は次ぎのお言葉には、

そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらふはこそ、すかさ

一つが有難き餘り、設ひ此の爲めに水火の苦毒の中に墮ちたりとも、更に後悔せぬとなるのであります。

六 「地獄に墮ちたりとも後悔す可ず候」の文

兎角我々は耳慣れが仕て可かぬのであります。初めて『歎異鈔』を手にし「たとひ法然聖人にすかさ参らせて、念佛して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候」の文を讀む時は、如何なる人も其の信仰の著しきに驚かぬ人は無いのである。「地獄に墮ちても後悔せぬ」とは、何うもよく信じたものと、何人も道理々屈を離れて、驚きを立てざるは無い處のお言葉なのである。爾るに讀み慣れて來ると、何時の間にか聖人が斯く手ひどく示されたものと、茲を甚だ無難作に、さまざま文句に讀み流して居る。是れが即ち耳慣れ、言葉慣れである。耳慣れ、聞き慣れの横着より生じ來るものであります。處が「地獄に墮ちても後悔せぬ」とは、私が此の罪深く、仕て見やう無さを、之をお見捨て下さらぬ御まこと、聞く上は、設ひ此の爲に何うあらうが斯うあらうが、設へ人は之を虚言と言ふとも、虚言でたまされて地獄に墮ちても後悔せぬとのお言葉である。設へ人が何と言はうと、此の何れの道も絶え果てたる者を、之が哀れて捨てられぬとある仰せばかりは、疑はうと仕ても疑へぬとの尊きお言葉である。全體「地獄に墮ちたりとも後悔すべからず候」の言葉つき迄が、思うて見りや實に珍らしき示され方である。夫れを私初め耳慣れして、平素さまざま文句に取扱つて居るのであるが、今度法藏菩薩の『歎佛偈』の文を讀むと、先き言ふ如く實に大悲の親様は、私の爲め「假令身を諸の苦毒の中に止くとも、我行精進にして、

よびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

他に善くなれる道のある我々では無いのである。我々は無常の人生に頼みを見出す可き方法などあらし無い。今にも自働車にひかれ、船がひつくり反る人生である。其危うき人生に、如何に力み如何程自分細工で骨折つても、何うとも仕て見やう無いのが是れ人生の約束、業報の有様である。其約束の境なれば、私の力では逆も何れの道も及ばぬ、仕て見やうが無い。然るに其の仕て見やうなき私なる事を兼ねて知召し、無邊の大悲を以て其の私の心中を察し、導き、之を救ひ遂げるとある大悲の心が、南無阿彌陀佛の思召であると、之をお知らせに預りたる時には、此の御哀れみの如何にも有難く、設ひ爲めに「念佛して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候」である。今迄何程も掻いても仕て見やう無つた此の心中、之を佛は疾くより知召し、其の爲め設へ身は諸の苦毒中に畢るも飽く迄忍んで悔ぬぬと、斯く迄身を投げ出して言ふて下さる遣る瀬無き御親切と、この佛の御眞實一つを聞く時は、今迄人の爲め、境遇の爲め苦しんで居ると思つて居たは、實は自分の業報の爲め、自分の身の惡しさから出て來る苦惱の鎗の爲めに苦しんで居たのである。然るに其の三界に仕て見やう無き此の身の爲めに、斯く迄遣る瀬無き大悲の胸を痛め給ふ廣大の御まこと、聞く時には、如何なしと私も、此のお慈悲の前には、最早や何程頭を上げやうとしても上ら無い。故に「たとひ水火の中に身を畢るとも、衆生の爲めには悔ぬと仕無い」との、大悲の仰せを頂くと、如何にも其のお慈悲

忍びて終に悔ぬず」とある廣大の御呼聲である。成る程して見ると、遣る瀬無き御心を頂いた味ひは、實に茲であると今度初めて氣づき、「地獄に墮ちても後悔す可らず」の文を今更の如く耳新しく喜ばせて貰うた事である。成る程して見ると輕い事ぢや無い、斯く迄の大悲の御苦勞なればこそ、聖人の此の御言葉があるのである」と、氣づかせて貰つた事であります。

七 聖人の常の仰せには

さて、すると『歎異鈔』結文の

聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

のお言葉も、又全く茲になつて來るのである。私は常に思はせて貰ふて居るに、此のお言葉は聖人常の仰せとあるからは、常に口癖のやうに仰せられたお言葉に違ひ無い。茲の言葉つきから見ると、何は更もあれ朝な夕なに聖人の仰せには「彌陀の五劫思惟の願を案ずるに……本願の忝けなさよ」と、常に此のお言葉があつたに違はぬのである。之は常に聖人は天親菩薩の「世尊我一心」の文を、曇鸞大師の『論註』にお示し下されたる

夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜己に非ず、出歿必ず由あるが如し。恩を知り徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし。又所願輕らず、若し如來威神を加えたまふにあらずば、將何を以てか達せん。神力

を乞加す、このゆへに仰て告げたまへり。我一心は天龍菩薩自督の詞なり。

の文をお引きなされて、天親菩薩自督の詞として喜びなされてあるのであるが、我々の毎朝拜讀する『正信偈』の文は、即ち聖人が佛に向ひ其の如くあなたのお自督を啓白し給ひたる偈文である。夫れにも先づ

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。

と、佛名を呼び上げて、直ぐ次ぎには、

法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在し、て諸佛淨土の因、國土人天の善惡を觀見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を起發せり。五劫に之を思惟して攝受したまふ。重ねて誓ふらくば名聲十方に聞こえん。

と、先づ法藏菩薩が因位の時、五劫思惟の本願をお起し下されたる事を示し下されてあるのである。之が決して言葉の順序としてや、眞宗の法門の立て方として、斯うあるのは無い。『聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願をよく――案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。』――私共『正信偈』を拜讀するに、此のお言葉と別々に頂いては何の詮も無いのである。『正信偈』の上にお説き下された御教化は、聖人が此の平素の御自督の儘を御述べ下されたに外ならぬのである。其の聖人が自督の喜びは、彌陀の五劫思惟の本願は人のためにあるので無い、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば此の親鸞の身はそこばくの業をもちける身にありけるを、助けんとおぼしたちける本願の忝けなさよ」と、即ち之れ程罪深く仕て見やうなき親鸞の心中を知召し下され、こ

のそこばくの業を持つ親鸞の身が哀はれて見捨てられぬとある本願とは、さて、有難やとあるのであります。

八 『東方偈』と『歸三寶偈』

一體に私共平素經文や聖教にお示しあるお言葉を、つい輕々と頂くやうになり、之は甚だ濟まぬことであると思ふのであります。之も序に言ふに、本年正月は私は何方へも失禮して廻禮にも出かけず、甚だ耻しき事ながら、皆様は元日勿々參詣せらるゝに、私は漸く五日になりて淺草別院に參詣したやうの事である。之も耻づかしき事ながら、夏季求道會の時にはあの如く皆様と一緒に報恩寺に參詣しながら、年頭にも參らぬは餘りにひどいと思ひ、夫れから報恩寺にも參詣さして貰うた。して佛前で御禮上げつゝ、何氣なく其處にある經文を頂いて、初めて氣が就き、驚いたはいつも茲て講話前に讀む

人身受け難し、今已に受く。佛法聞き難し、今已に聞く。此の身今生に向つて度せずんば、更にいづれの生に向つてか此の身を度せん。大衆諸共に、至心に三寶に歸依したてまつるべし。

の『歸三寶偈』の御言葉であります。此のお言葉がどこか經文の上に在るかといふに、平素何氣なく思つて居るのであるけれども、之が實に同じく『大經』の『東方の偈』の中に在るのである。『東方の偈』は御存知の如く、聖人が『和讃』に於て

釋迦牟尼如來偈をときて、無量の功德をほめたまふ。

と示し下されたる、あの偈文にして、東方諸佛國の菩薩衆を始め南西北四維の諸の菩薩衆が、皆な各、天の妙華、寶香

無價の衣を齎して佛のみに往き、威然として天樂を奏し、和雅の音を暢發して、佛の無量の功德を歌歎し、稱讃し給ふ處の彼の偈文である。中に大士觀世音が起ちて服を整へ、稽首して佛に問ひ奉るには、「佛何の故に今日斯くはニコ」と笑み給へる。願はくば其のお意を説き給へ」とお尋ねした。すると佛之に對して

梵聲雷震の如く、八音妙響を暢べたまふ。云々。

佛は十方より來る諸大士に對して、「いかづち」の如き梵聲を放ち、我は悉く汝等の願ひを知る、汝等必ず決定して佛に作る事が出来るぞ」と、其の諸の菩薩衆に對し記を授け給ひ、之より淳々として佛の説法の文があるのであります。而して其の「偈」の終りに

壽命甚だ得難く、佛世亦値ひ難し。人信慧有ること難し。若し聞かば精進にして求めよ。法を聞い忘れず、見て敬ひ得て大に慶ばよ。則我が善き親友なり。是の故に當に意を發すべし、設へ世界に満てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば、かならず當に佛道を成じ、廣く生死の流を度すべし。

と。即ち我々今生に壽命を得るは難く、佛のみに値はせて貰ふことは又難い。又信慧は即ち信心の智慧である、其の信心の智慧を獲ることは猶ほ難い。故に若し今生這る瀬無き仰せを聞かば、聞くなり精進に、一心になつて聞け。聞いて其の廣大な恵みを頂き慶ぶ者は、是れ我が善き親友であると、これは誰も知る名高き御文である。故に皆んなが意を發し、設ひ大千世界に、滿てらん火をも過ぎ行きて、佛の御名を聞く者

は、必ず生死の流れを渡る事が出来る」と。即ち先きの『歸三寶偈』と同じ思召しをちやんと茲に斯く説かせられてあるのである。『歸三寶偈』に對し言ふならば、こは實に『求道の偈』とも可ふ可き有難き御教化である。之がちやんと斯く始終讀む御經の上に於てある。夫れを斯く、皆様は御經は讀まれぬが、私共は小供の時より讀み習ひ、始終現に目にしてながら、今日迄をよそに見過して居たのである。夫れを先日斯く今更の如く氣づかせて貰ひ、喜ばせて貰ひた事であります。

九 そこばくの業をもちける身にありけるを

さてすると今の「彌陀の五劫思惟の願を案ずるに」の文に於ても、我々にする時は「イヤ『正信偈』に於ても斯く夫れが初めから出でたる」などと言つて居るのであるけれども、聖人にする時は、頂かれた儘が其の儘『正信偈』となつて表はれた譯である。言ひ換ふれば、「聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願を案ずるに……かたじけなさよ」と喜ばれたあなたの常の仰せの儘が『正信偈』の御自督となり、又『歎異鈔』のお示しとなつた譯である。さて茲になると、斯く聖人の頂かれたは、聖人が特に信仰深き方である爲めであると、反すゝも聖人を我々と離して、特別扱ひに仕てはならぬ。聖人が仰せらるゝは、佛が十方衆生と呼びかけ下されたを、親鸞が親鸞一人が爲めと頂きたは、親鸞の頂き巧者で頂いたのでは無い。親鸞自分は實に若干の業深き身であるを、其の如く業深き身であると言ふた迄に外ならぬと、仰せ下さるのである。茲は斯く罪深い身であると然らう聖人が思召されたが、何れいので無い、罪の深いを、深いと言はれた丈の事である。

現に我々の日常が業報の深い日暮を仕て居るのであります。而して其の我々の業報深き有様を見て、大慈の親が夫れが哀はれと、飽く迄其者を見捨て給はぬ大悲の御苦勞が、今の「諸の苦毒の中に身を止くとも忍んで終に悔ぬぬ」とあるお言葉である。其の遣る瀬無き御苦勞を私共頂くもの故、聖人と同やうに、斯く若干の業を持ちける身にてありけるを、お見捨て無く夫れ程迄の思召しとは、能くも「我々も頂かせて貰へるのである。茲になると頂く所は、唯此のひと所である。話は廣く言へば何れ丈けても廣く言へ、又た細かくも言へるのでありますけれども、頂く處は唯ひと所しか無い。其のひと所は即ち此の「そこばくの業をもちける身にてありけるを助けんとおぼし立ちける本願の忝けなさ」と、茲ひと所なのであります。處が茲が頂けぬ迄は、我々の斯く今日あるは是れ皆な若干の業報で、斯ういふ風にあるのだから仕やうが無いとなる。又若干の業報なれども、其の者を助けるとあるお慈悲であるから、業報が有つても構は無いのだ、といふやうの事になつて来るのである。夫れでは佛の本願は、我々の今斯く惱んで居る業報の點に就きては、九て涙の無い事となり、佛の諸苦毒中忍受不悔の御苦勞は、何の事だか分ら無くなつて仕舞ふのである。然うでは無く、私共が若干の業報で、今斯く苦しんで居る此の様が、大悲の目より御覽下さると、可哀相であつて在られぬのである。故にこの仕て見やうなき我々が、彌々頂かせて貰ふ所は、外で無い。「此の淺間しく仕て見やう無き此の心、此の心中を斯く迄お察し下され、こ奴が可哀想とばかりに夫れ程迄の御苦勞とは、さて——大悲の

有難や」と此の外無いのであります。

一〇 狂亂所爲多きが如し
又いつも言ふ『涅槃經』の如來は一切の爲めに、常に慈父母と作りたまへり。當に知るべし、諸の衆生は、皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて

狂亂所爲多きが如し。
の文にしても、其のお心は何うかといふに、私共が種々なる煩惱業報の爲めに、狂はされ迷はされてる有様は、恰も鬼魅惡魔に身を入れられて、狂ひが種々なる所作を演じて居る様である。其の爲め之を見そなはす大悲の親が、心を痛めて苦行を修し下さる様も、又鬼魅につかれて狂亂の體であるとしてあります。私共が日常種々なる煩惱に追ひ立てられ、腹を立て愚癡をこぼし、色々自分の思ひであせつて居る様は、全く鬼魅に著せられて狂亂の姿である。私は熟々思ふに、我々は氣儘な者で、法を喜ぶのも、我々は自分の手も足も出ぬ時には喜びが深い。處が少し世が「らく」になり、氣樂になると「あれもあー仕度い、人にも斯く仕度い、自分にも斯くあり度い」と、直ぐ自分に對し、人に對し、世間に對し欲を起し來るのである。然うなるとよく仕度いと思へば思ふ程、益々よくゆかぬ。直ぐ腹を立て忽ち心が開みになつて仕舞ふ。初め病氣や苦しんで、箱積めの時はすなほに喜んだ奴が、少し病氣が快くなり、思ふやうになり出すと、忽ち之れである。之が即ち業報である。業報で出來無い事を、何時迄も仕度い——の思ひが止まぬのが是れ業報である。而も何程思つても、善きも惡

しさも、一つも思ふやうならぬで死ぬ迄苦しむのが、是れ、そこばくの業報である。處が其の爲め我々が斯く迷ひ苦み、狂ひの様を演じて居るに對し、其の惱むのを止めよ、狂ひをよせと言はれるのでは、何程言はれても夫れが止まぬで苦しんで居るのだから仕やうが無い。處が之を見給ふ大悲の佛は何と仰せ下さるかといふに、私の其の狂ひ惱んで居るのが皆な煩惱業報のなし業なることを知召し、如何にも其の煩惱具足の凡夫が可哀相ぢや、夫れが皆な煩惱惡業の所爲ぢや」と、之を眺めて泣いて下さるのである。で始終申す『歎異鈔』九章のお言葉には、即ち

よく——案じみれば天におどり、地におどるほどによろこぶべきとをよろこばぬにて、いよく——往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきことをおさへて、よろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしらしめして、煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんと、こゝろぼそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり。云々

煩惱の所爲々々々々とお示し下さるが、即ち我々の鬼魅に著せられて狂亂所爲多き様である。我々は實に其の如き性分、身の上であるぞと、お知らせ下さるのである。

一一 人生て一番心のらくなこと
そこで皆さん、人生て一番心のらくな事は、自分の性分を性

分通りに人に見て貰ふ、是程らくな事は無いのである。自分が善く無きに、立派に見られて居るのも實に苦しい。さればとて、自分が物事に心配し苦勞するのを、お前はつもらぬ事を氣にすると言はるゝのも實につらい。爾るに、自分が其のつもらぬ事に氣を廻はし、些細な事に人を不足に思ひ、腹立てするのを「腹を立てるのがあの者の性分である。不足に思へるが彼れの病根である」と、十人が十人夫れ——の性分がある。夫れを其者の性分として性分通り深き同情を以て眺めて呉れる人あると、是程有難い事は無いのである。處が今佛は煩惱具足が實に汝等の性分であると、即ち今の『歎異鈔』に、「佛かねて知召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、云々」とある、茲を能く頂かねばならぬのであります。

一二 汝は是れ凡夫なり

『觀經』で韋提希夫人が釋尊に法を聴かれる處にも何うあるかといふに、廣大な佛力を以て韋提希に、諸佛世界の有様を了々明鏡を執つて、面像を見るが如く、お見せ下された。して仰しやるには

汝は是れ凡夫なり。心想羸劣にして、未だ天眼を得ず、遠く觀ること能はず。諸佛如來は異の方便まし——て、汝をして見ることを得しむ。

と。何氣なく思つて居るが、今の「佛かねて知召して煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」とあるが茲である。

「汝は是れ凡夫なり、心想羸劣にして未だ天眼を得ず、遠く觀ること能はず」「汝は是れ凡夫ぢやもの、觀えやう筈が無い」と仰しやつて下さる御言葉は、是れ佛兼ねて知召して

煩惱具足の凡夫と仰せ下さるる言葉なのである。て聖人は『化身土卷』に於て茲をお知らせ下されて、

汝は是れ凡夫なり心想羸劣にしてとは、則ち是れ惡人往生の機たることを彰はすなり。云々。

我々日頃何氣なく讀み過ぎて居るのであるが、佛が韋提希が「自分の力では見えませぬ」と言ふに對して、「汝は是れ凡夫ぢやもの、心想羸劣にして觀えぬのが當り前だ。」と言つて下さる此の御言葉は、之を我々にする時は、皆さんが歎いて「何うも思ふやう喜ばせぬ」と言はるゝに對し、「汝は凡夫ぢやもの、もとより其の喜ばぬのが當り前だ」と仰しやつて下さる御言葉である。實に此の一語、佛兼ねて知照して、我々は如何にしても善くなれる者で無いぞと知らして下さるのであります。又聖人は『化身土卷』に於て、今の文のあとに、善導大師の文を擧げさせられ、

又云はく、定散俱に廻して寶國に入れ。即ち是れ如來異の方便なり。韋提は即ち是れ女人の相、貪瞋具足の凡夫の位なり。

とある。即ち韋提は是れ我々凡夫の代表者なのである。阿闍世なる一子を持ちながら、『觀經』に於ては佛に向ひ世尊我むかし何の罪ありてか此の惡人を生じ、世尊復何の因縁あつてか提婆達多と眷屬たる。

と號泣し、又唯願はくば世尊、我が爲めに廣く憂惱無き處を説き給へ。我當に往生すべし。閻浮提濁惡世をば樂はず。此の濁惡の處には、地獄餓鬼畜生盈滿せり。不善の聚多し。

と求哀懺悔する韋提希は、是れ即ち女人の相、貪瞋具足の凡夫の位にして、即ち凡夫の代表者である。其の韋提希が佛の遣る瀾無き惠みに會ひ、満足して次に言ふには、

時に韋提希佛に白して言さく。世尊我が如きは今は佛力を以ての故に彼の國土を見たてまつる。若し佛滅後の諸の衆生等は、濁惡不善にして五苦に逼られん。云何してか當に阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべき。

と。而して此の言葉に善導大師の名高き釋が有りて、『信卷』に夫れを引用して出になる。夫れは

此の五濁五苦等は、六道に通じて受け、未だ無き者有らず常に之に逼惱す、若し此の苦を受けざる者は、即ち凡數の攝に非るなり。

と。即ち五濁五苦等に逼めらるゝ處が此の人生であつて、假りに此の世に在る者に、五濁五苦等にさいなまれざるは無いのである、若し此の苦を受けぬ者ある時は、それは「凡數の攝に非るなり」して、苟も凡夫なる上は、逼めらるゝが當り前である。之が實に佛兼ねて私の性分を知照し、煩惱具足の凡夫と仰せ下さるものである。

一三 煩惱の所爲なり

猶ほも一つ言ふと、全體支那にて、善導大師が他力を著しくお知らせ下された初めなのである。而して夫れが何からか。夫れ迄も支那にて『觀經』の註釋は有つたのであるけれども、夫れ迄は皆な韋提希を七地以上の權化とあがめて見て居たのである。處が夫れを善導大師は今の「汝は是れ凡夫なり」の仰せの儘に、「韋提は是れ女人の相貪瞋具足の凡夫位」と、即

ち矢張り人生の苦に泣き、愚癡を言ふ凡夫であると。之が實に私共に他力の惠みが來て下さるものなのである。而して之が何か、即ち私が其の如き淺聞しき者と言つて下さるのである。即ち之が私の狂亂所爲多き有様を、皆な煩惱のなしわざと、遣る瀾無く言つて下さるのであります。

又之は今夏求道會に、篤くとお話する積りて今より楽しんで居る處であるが、後に茲の阿闍世王が、父王を殺した事を悔み、全身に悔熱を生じて惱亂するのを、佛が月愛三昧に入りて其心中を洞察し、之を照し、救ひ給ふ處がありて、聖人は其處の『涅槃經』の文を『信卷末』に長々と引きなされてある。夫れを讀むと、如何に佛と雖餘りに仰しやり方がひどいと思ふ迄に茲が書かれてある。即ち阿闍世王に向はせられて、「汝父を殺すと雖も是れ汝の本心から仕たので無い、皆な煩惱のなしわざである、皆な夢、幻の所爲である事を佛兼ねて知照し、其の汝を捨てぬとある慈悲である」と、説かせらるゝ處に、如何にも仰しやり方が際立つてあるのである。序に之も讀ませて貰うと、其の一節に

大王衆生の狂惑に凡て四種有り。一には貪狂、二には樂狂、三には呪狂、四には本業緣狂なり。大王我が弟子の中には是の四狂有り。多く惡を作ると雖我終に是の人犯戒なりと記せず。是の人の所作三惡に至らず。若し還つて心を得ば亦犯と言はず。王本國を貧つて此れ父王を逆害す。貪狂の心を以てために作せり。云何ぞ罪を得ん。大王人の耽醉して其の母を逆害せり。既に醒悟し己つて心に悔恨を生ずるが如し。當に知るべし、是の業も亦報を得じ。王今貪醉せり、

本心の作せるに非ず。若し本心に非ずは云何ぞ罪を得んや。と、之が皆な私のする事を、凡て煩惱のなしわざと見て下さるといふ佛の慈悲を説き下さるのである。爾るを茲を見聞達えて、煩惱のする事故かまはぬと得手に取る時は大間違ひである。こは佛が私の罪惡を之れ程迄に察して言つて下さる、察しのお言葉なのであります。又

大王譬へば幻師の四衢道の頭に於て、種々の男女象馬瓔珞衣服を幻作するが如し。愚癡の人は謂て眞實と爲す。有智の人は眞に非ずと知れり。有殺も是の如し。凡夫は實と謂へり、諸佛世尊は其れ眞に非ずと知しめせり。大王譬へば山谷の響の聲の如し、愚癡の人は之を實の聲と謂へり、有智の人は其れ眞に非ずと知れり。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂へり、諸佛世尊は其れ眞に非ずと知しめせり。大王實と謂へり、諸佛世尊は其れ眞に非ずと知しめせり。凡夫は實と謂はん、諸佛世尊は其れ眞に非ずと知しめせり。大王熱の時の炎の如し、愚癡の人は之を水なりと謂はん。智者は了達して其れ水に非ずと知る。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂はん、諸佛世尊は其れ眞に非ずと知しめせり。云々。

こは亞弗利加あたりの沙漠では、炎が水の如く見えるといふ夫れであらうと思ふのである。

一四 五劫思惟の願をよく案ずれば

さて之を邪見に聞くと、何か余り罪惡を無視した仰せのやうにあるけれども、之が私の淺ましき罪惡の振舞ひを、皆な煩惱の所爲と知召し、私の性分通り哀はれと御承知下さるのである。而して唯承知して下さるだけなら夫れ丈けなるも、爲に其の者が捨てられぬとのあなたの心より、其の者の爲めとあなたの一身を捨て、苦行を修し下さる様は、假令身を諸の苦毒の中に止くも我行精進にして、忍んで終に悔ぬとある此のお心である。又其の御苦勞の様は、即ち先き言ふ「諸の衆生は皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し」と。即ち佛が其の者を救はうと、其の者の爲めに心配し苦勞し、遣る瀬無く仕て下さる五劫永劫の御苦勞の有様は、又此の鬼魅に著せられて狂亂の體である。丁度茲で此の御言葉の意味が一轉して、今度は佛が私の爲め仕て下さる御苦勞の有様となるのである。

そこで佛のお慈悲は、私が斯く悩み苦しむ心中を洞察して、如何にも哀はれと察しをつけて下さる御哀はれみと、何程皆様に言ひても中々届かぬ。斯くいふと、中には言はれるには成る程哀はれと言つて下さるは有難いけれども、然う聞いても私の現在が何とも開けぬから仕やうが無いと、佛の五劫永劫の御苦勞を、私の現在の苦しみと離して言はれる人が多いのである。成る程一應は然うもあらうが、茲に皆様に聞いて頂き度いのは、佛が其の哀はれ可哀想との思召より、私の其の苦、其の悩みを取つてやり度いとあほし立ち下され、常に

私の貪瞋煩惱の心に向うに、あなたの無貪無瞋無癡の心を以て仕て下され、其あなたの遣る瀬無き御苦勞がたまらうとて、此の私の其の苦が見捨てられぬ廣大のお心の塊りが五劫永劫の御苦勞となつたのである。故に又此のお心より私を救ふ可く廣大の淨土をお作り下され、又六根不具足の者を救ふ爲めには、諸の通力をも、御成就下された。即ち斯く、私の一々の欠陥、一々の苦惱が、哀はれと夫れを救はふ爲めのあなたの御苦勞が塊り表はれて、七寶莊嚴の淨土の建設ともなつたのである。で茲になると、いつも言ふ例の實相身、爲物身である。實相身は佛の一如法性の醒みの醒め、夢の醒めたる廣大法身の妙境であるが、併し佛は其の實相身の儘で私をお助け下さるのでは無い。其の一如實相の境界より、私が今日此の苦惱の様を御覽下され、夫れが哀はれと遣る瀬無く思召し下さるあなたの止むに止まれぬ廣大のお慈悲が表はれて、一にも二にも私の爲めと、私の爲め本願を建て、苦勞をし、淨土を御成就下されたお姿が、爲物身にたまりますのである。而して其のお姿を表はし下されたが、私一人の爲めぢやから、即ち「親鸞一人が爲めなりけり。」茲になると何うしても眞宗の教えの趣きは「彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、……あほし立ちける本願のかたじけなさ」と、もう此の外無いのであります。

一五 五劫の思惟永劫の眞實

さてすると私共其の廣大なる七寶莊嚴の淨土は眼に見る事は出来ぬ、八萬四千の攝取の慈光も拜む事出来ぬ、又三十二相八十隨形好のお姿も、拜する事出来ぬ。去りながら夫れ程

廣大な淨土を成就し、夫れ程御苦勞下されたお姿は、唯私一人が爲めなる事は頂かれるのである。恰も親より遺産を受けるとなると、一草一木、一枚の着物に至りて迄が皆な親の恵みの塊りて、夫れが一々何ういふ譯けかは私には分らぬが、引つくるめて自分の身を支え、生命をつなぐ色々は、皆な親が私の爲め遣して下された親の眞實の塊りなると同じであります。今大悲の親様は、私が斯く生死海中に行き詰つて仕て見やう無き心中を御洞察下され、飽く迄其の者が捨てられぬ廣大な慈悲心より、其の者の其の苦を照らし、其の悩みを滅じ、其の罪を救はんと。茲で、取違えてならぬのは、大悲の思召は唯徒らに我々の極樂往生を先きと仕て下さるのでは無い。が明に此の苦惱の私が哀はれととの廣大の眞實が重なり、遂に廣大な淨土に連れて行く迄飽く迄私を捨てさせ給はぬ廣大なる御哀はれみにたまりますのである。て其の御哀みより爲物身を現じ、七寶淨土を現はし、此の世に迄還相四向の力を現じて、此の仕て見やう無き私を救はうととの廣大の御心で待ち受け、待ち兼ねて居て下さる御哀れみである。て今斯く私共人生で悩み苦み、仕て見やう無くなつて居る者が、頂く處は此の私の悩みの去らぬ心中を御洞察下されて、其の悩み腹立ちによくも、呆れも仕給はず、彌々此の私を捨てぬの思召の御塊といふ此の外にない。此の遣る瀬無き御哀れみでたまります故、一念其の廣大の御心が此の苦の私の心の上に頂けるなり、忽ち心中に破關滿願の徳が來て下さるのである。如來の遣る瀬無き思召が頂けた一念は、我々の如何なる悩みも欠乏も、如何なる我々の仕て見やうな

さも、唯夫れが可哀相と丈けぢや無く、夫れより飽く迄捨てさせ給はぬ大悲の眞實が溢れて來て、今迄煩惱の水が充ち満てる心中に、大悲の水が充ち満ちて下さるのである。て『和讃』には、

本願力にあひぬれば、

むなしくすぐる人ぞなき、

功徳の寶海みち／＼て、

煩惱の濁水へだてなし。

即ち其の一念に大悲心と轉じ變へて下さるのである。聖人は殊に轉の字を喜んで、轉惡成善と示し下された。又

彌陀智願の廣海に

歸入しぬればすなはちに、

大悲心とぞ轉ずる。

今迄人生に善し惡しばかり言うて居た心が、不思議なる哉、此の遣る瀬無き御眞實を聞く一念に、掌を反す如く變つて仕舞ふのである。を皆んなが變はる事はかしに目をつけて先き自分の方より變へやうとするから可かぬ。變はるは變はる可き物を與へらるゝから變はるのである。我々の善きも惡しきも、先きお慈悲の方から、見抜かれ、覆まれて仕舞うからイヤでも満足せなければならぬやうになるのであります。又先きの「そこばくの業を持ちける」の文にしても、業が困ると思つても、其の業報を一寸も改善する事の出来ぬのが我々の業である。其の若干の業で縛られて居るが哀はれて堪えられぬと、之を救はんとあほし立ちける五劫永劫の御苦勞故、其の思し立ちの忝けなやと、其のお見捨て無き眞實一つて一代腹ふくらされたが聖人御一生のお喜びである。

一六 阿彌陀佛と諸佛との關係

猶ほ今日の話と多少關連して、昨年末報恩講以來喜ばせて

貰うて居る事を一言話させて貰ふと思ひます。夫れは一口に言ふと、此の遣る瀬無き思召の上より頂きたる阿彌陀佛と十方諸佛との關係とも言ふ可き事につき、新しく喜ばせて貰うて居るのである。そは丁度先きの『歎佛偈』の御文に、「十方の世尊は智慧無礙にまします。常に此の尊をして、我が心行を知らしめん。假令身を諸の苦毒の中に止くとも云々」とある此の「十方の世尊は智慧無礙」の無碍である。此の無碍は、十方の有りとする世尊は皆な無碍人にましますのである。夫れ故『華嚴經』の文には、

文殊の法は常に爾なり。法王は唯一法なり。十方無碍人一道より生死を出てたまへり。道とは一無碍道なり。無碍とは謂はく、生死即是れ涅槃なりと知るなり。

すると十方一切の諸佛は、皆な無碍人にましく、無碍とは生死の迷ひの上より即涅槃と悟られたのである。すると其の數塵沙の如き澤山なる一切諸佛なるも、其の一切の諸佛が各異つた道より生死を出てられたに非ず、皆な一無碍道より生死即涅槃と了知して、生死を出て給ひた無碍人である。其處で親鸞聖人は其の無碍の一道とは何かとなりて『歎異鈔』には宣はく

念佛者は無碍の一道なり。云々。

すると『華嚴經』にある十方一切の有りとする無碍の諸佛は、皆な此の念佛の一道より生死を出て給ひた人となりて、茲實に著しき事となる。又茲を『和讃』には、

十方三世の無量慧、
おなじく一如に乘じてぞ、
攝化隨緣不思議なり。

せて貰うて居るのであります。

一七 十方諸佛と善巧攝化

處て以上はちと文句沙汰になつたやうであるけれども、聖人の思召は何も六かしき事があるのて無い。佛教と云へば此の南無阿彌陀佛を知らせて下さる教が佛教、お經と云へば凡てのお經は此の南無阿彌陀佛のお慈悲一つをお説き下されたもの、一道とあれば此の南無阿彌陀佛の一道と、之が何も一々調べて仰せられたのでは無い。と同やうに此の念佛の廣大なお慈悲を頂きた上から、十方の諸佛も此の南無阿彌陀佛の一道により佛になり給ひたに外ならぬと、お知らせ下されたのであります。すると觀音は觀音、勢至は勢至て一切諸佛には夫れく別願があるは何か。先きの『和讃』に「十方三世の無量慧、おなじく一如に乘じてぞ、二智圓滿道平等、攝化隨緣不思議なり。即ち夫れく二智圓滿の姿を人生無量々々の方面に現はして、無量無量の結縁に隨ひ、私を彌陀の本願に追ひ込み、導き、攝化して下さる爲に、夫れく種々の異つた別願があるのである。て畢竟私が今日彌陀の本願念佛を聞く氣になる迄、其處迄私を導いて下された權化の御苦勞のお姿に他ならぬのである。て『和讃』には又

聖道權化の方便に、

衆生ひさしくとゞまりて、

諸有に流轉の身とぞなる、

悲願の一乘歸命せよ。

それで私共が夫れ等諸佛のおひとり／＼に目をつけ、「イヤ斯うして頂き度い、斯ういふ利益に預り度い」と、自分の方より自力のはからひ心を運んで、一佛々々を念してる中は、未だ眞實のお慈悲が分らぬものにて、是れ聖道權化の方便の中に止

彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり、一心をもちて一佛を、ほむるは無碍人をほむるなり。

即ち同じく一如の廣大なる境界より夫れく／＼の姿を現はして。色々の縁により導いて下さる十方三世の諸佛は皆な別々の諸佛なるも、其の諸佛は同時に皆な無碍人にして、皆な一無碍道より生死を出てられたる人であり、其の一無碍道とは、即ち念佛の一道といふ事になる。又『唯信鈔文意』で頂くと、この信心をえがたきことを、小經には極難信法とみへたり（中略）釋迦牟尼如來は五濁惡世にいて、この難信の法を行じて無上涅槃にいたれりとときたまふ。云々。

之は明かに『阿彌陀經』の中に、
舍利弗當に知るべし、我れ五濁惡世に於て、此の難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に此の難信の法を説く。

と。釋尊自ら我れ念佛の法により阿耨多羅三藐三菩提を得、再び夫より顯はれて一切世間の爲に、此の念佛の法を説くと仰せられてあるのである。又『口傳鈔』には『般舟經』の「三世諸佛念彌陀三昧成等正覺」の文を引き、三世諸佛皆な彌陀法により生死を出てられたることを説き下されてある。すると我々何氣なく思つて居るのであるけれども、十方の諸佛は皆な南無阿彌陀佛の一道により、生死即涅槃の證に入り、又再び現はれて其の南無阿彌陀佛を知らせて下さるが三世十方一切諸佛の教である。即ち此の罪惡の者を見捨て無きお慈悲一つを知つて下さるが三世十方諸佛の教である。茲て私は近頃喜ば

つて居るものである。信仰問題にしても、自分の方より思ひを運び、佛のお慈悲は斯う／＼と、結局此方の心の思ひなしで喜んで居る中は、矢張り此の區域に低迷して居るものである。處が諸佛は斯く私の方よりは自力根性に向ふ夫れを縁として、長々遣る瀬無き善巧攝化の御苦勞があるのである。て又先きの『東方偈』の文には、宣はく。

若し人善本無ければ、此の經を聞くことを得ず、清淨に戒を有てる者、乃正法を聞くことを獲。曾つて更に世尊を見たてまつりしもの、則ち能く此の事を信ず。謙敬して聞いて奉行し、踊躍して大に歡喜す、憍慢と弊と懈怠とは、以て此の法を信じ難し。宿世に諸佛を見たてまつりしもの、樂んでは是の如きの教を聴く。云々。

即ち私共今日此の廣大の教を聞く事を得たは、一應二應の縁で無く、過去遠々の間、十方恒沙諸佛の遣る瀬無きお導きを蒙つたによるものである。去りながら其のお導きを蒙りながら今日迄は、「持ち前の自力根性に係はつて、自力叶はて長々流轉して來た。爾るに其の遣る者を彌々お見捨て無き遣る瀬無き諸佛の御方便遂に功表はれて、今日因縁純熟して阿彌陀佛の本願に遇うを得たのである。さすれば一切諸佛の出現は、唯此の私を今日此の遣る無きお慈悲に引き入れ下さる爲めばかりの權化の御手引きにして、彌々知らせて下さる處は、其の一切諸佛も同じく此の一道によりて生死を超越したとお知らせ下さる、其の南無阿彌陀佛の一道の外無いのである。て彌々の結局は先きいふ

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信

心の行者には、天神地祇も敬服し、魔界外道も障礙すること無し。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もあよぶことなきゆへに無碍の一道なりと云々。

此の南無阿彌陀佛の無碍の一道に引き入れ、満足せしめ下さる爲めばかりの廣大の手引き、宿善の御催うしに外ならぬ。さりながら今もいふ如く其の諸佛の御手引き、宿善の御催しには我々過去遠々の昔より遇ひながら、今日彌々盡十方無碍のお慈悲を聞く迄は、今の今迄自力の迷心にこだはつて、流轉する外無つたのである。斯く私の方は流轉する、其の者に聞かせんと、十方諸佛は自ら其の證據に立つて、勸信證誠なしたされた。『和讃』には

恒沙塵數の如來は、

萬行の少善さひつゝ、

名號不思議の信心を、

ひとしくひとへにすゝめしむ。

十方恒沙の諸佛は、

極難信ののりをとき、

五濁惡世のためにとて、

證誠護念せしめたり。

諸佛の護念證誠は、

悲願成就のゆへなれば、

金剛心をえんひとは、

彌陀の感恩報すべし。

十方無量の諸佛の、

證誠護念のみことにて、

自力の大菩提心の、

かなはぬほどはしりぬべし。

即ち十方諸佛が證誠護念下さるに見ても、到底私の自力では行けぬことが分るのである。斯くてとうと諸佛の遣る瀬無きお護り、御手引きにて、彌々今日お見捨て無きお慈悲の中に引き入れて下された一念が、即ち其の長々のお育ての宿善開發の一念である。而して其の一念には十方法界、唯此の一味の盡十方無碍のお恵みの外無いのである。と言ふが外て無い。

さて以上の意味をもて、今日の『歎佛偈』の文を頂くと、又格別に有難いのである。『幸くば佛信明したまへ、是れ我が眞證なり。……我が行精進にして忍びて遂に悔ぬじ』——即ち此の遣る瀬無き思召を、私に知らせ下さるが十方佛にして、釋尊の娑婆往來も一に此の爲めに他ならぬのである。『歎異鈔』二章の示しには、

彌陀の本願まことにあはしますば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにあはしますば、善尊の御釋虚言したまふべからず。善尊の御釋まことならば、法然のおほせそらごととならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。云々。

即ち十方佛が本師本佛の阿彌陀佛のお慈悲を知らせて下さる、其の隨一として大聖釋尊も此の世に來り、善導、法然も御出世下されたのである。而して聖人にする時は、其のやるせなき諸佛方便の時到来、遇ひ難き眞の智識法然聖人に遇ひまつるを得たのである。『和讃』の仰せには、

眞の知識にあふことは、

かたきがなかなををかたし、

流轉輪廻のきはなきは、

疑情のさほりにしくどなき。

して其の眞の知識直き／＼の教えを頂けば、

親鸞にあきては、唯念佛して彌陀にたすけられ参らすべし

と、よき人の仰せを被ふりて信する外に別の仔細なきなり。法然聖人の仰せらるゝ儘が、彌陀の本願直き／＼の仰せ、十方諸佛の稱譽せらるゝ處、第十七願其の儘の有様である。して本願其の儘をお聞かせに預れば、最早や聖人に於ては「たとひ法然聖人にすかされ参らせて、念佛して地獄にちたり

初めの『歎佛偈』に、「十方の世尊は智慧無碍にまします。常に此の尊をして我が心行を知らしめん。」とある如く、もと「大悲の阿彌陀佛が、十方三世有りとする佛に此の我が慈悲を知らしめ、其の十方佛の稱譽讃歎により、十方世界の有りとする罪惡の衆生に、我が親心を知らしめん、とあるが阿彌陀佛第十七願のお意なのである。夫れあればこそ、即ち斯く十方諸佛が現はれて、有らゆる縁を促へて大悲のお心をお知らせ下さるのである。而して之が皆な他ならず、夫れ程迄に私の惡業深きを佛兼ねて見すかし給ひ、其の私の仕て見やう無きを哀れみ思召し、此の私一人に救ひの親心を知らせんとの大悲の御苦勞が、五劫永劫の御苦勞、十方恒沙諸佛の御出世も此の廣大のお心に外ならぬのである。て曾つても或人に「如來の大悲は私の惡しきを何處迄も捨てさせ給はぬ眞實」と話したら、其人驚いて「君はひどく利己主義な事を言ふ」と言はれた。成る程利己主義といふ段になると、恒沙諸佛の出世も私一人が爲め、五劫永劫の御苦勞も私一人が爲めと、實に利己主義の極である。去りながら夫れ程迄に仕て頂かぬことにはらちのあかぬ私なのである。爾るに其の私の根性をよく／＼御覽下され、夫れが可哀相で捨てられぬとある御眞實の前には、如何な十惡五逆の私も恐れ入りて、煩惱即菩提と頭が下らざるを得ぬのである。『和讃』には宣はく

本願圓頓一乘は、

逆惡攝すと信知して、

煩惱菩提體無二と、

すみやかにとくさとしむ。

まことに廣大の御哀れみであります

一八 聖人の自誓

とも、更に後悔す可らず候。何故なれば、何れの行も及びがたき、地獄は一定すみかの、この仕方なき親鸞の心中をお察しありて、此の親鸞をお見捨て下さらぬお慈悲と承はるのである。すれば自分に於ては、もとより地獄を厭ひ、極樂に参り度い爲め信ずるので無い。唯如何にもこの地獄一定の淺間しき親鸞を、捨てさせ給はぬ思召の有難くて、斯く迄の廣大な御親切に遇ふ上からは、設ひ爲めに地獄の火炎の下に墮ちて焼け死にしても更に不平は無いのである。設ひ親鸞が地獄の火焔の中に焼かれても、其の火焔の中を掻いぐり、捨てさせ給はぬおまことと聞く上は「地獄に墮ちても更に後悔す可らず候」と。斯くお知らせ下されたる聖人の告示は、法然聖人の仰せ、即ち大悲の本願を、自ら頂き心地で受取つて、私共に其の頂きやうを見せて下されたのである。即ち私共の手を執つて、此の本願に遇ふからは、親鸞も地獄に墮ちても後悔せぬぞとお知らせ下さるのであります。而して之を私より言ふ時は、斯く仰せ下さる聖人の言葉は、「假令身を諸の苦毒の中に止くとも、忍んで終に悔ひし」の大悲の仰せが其の儘、聖人の言葉となつたものである。聖人が「此のお慈悲の爲めにはたとひ地獄の墮ちても後悔せぬ」との言葉が、其の儘實際に現はれて、私共に其のお慈悲をお届け下さる爲めには、流罪に遭つても後悔せぬとの遣る瀬無き思召となつたのである。即ち聖人が御一代の御苦勞は、法藏菩薩が私の爲め御苦勞の様を面の當り此の世に見せて下された事となる。斯く頂き來れば極り無き御哀れみであります。(二月十一日)

雑 録

人生と信仰

吉田 藤吉

御寺参りの婆さんが歸り途すがら一人の道ずれとの問答

婆さん、家の嫁は意地悪で、妾に對する仕打がどふも面白くない。しかし妾は御蔭様で、耐へさせて頂く。こゝが平素御聞かせに預かる俗語じやからの。

婆さん、あなたのおよろこびは物足らぬ。「この悪い婆奴を、宅の嫁がやさしくしてくれる。これも偏に如來様のお蔭じや」と、これが、ほんまの御信心の味ひじや。

なるほど。今日はよい御意見にあづかつた。これから妾もそふ云ふうに喜ばして頂く。

やから。

婆さん、悪くかつた。時に婆さん、之からあらためて如來様の仰せを、あなたと二人で、共に頂かしてもらふじやないかな。

はい。如來様の仰せなら、なんぼふても頂きますよ。

婆さん、氣げんがなほつてうれしや。婆さん。如來様の仰せは御互によく心を留めて頂かねば、勿體ないからの。

はい。そふとも。兎の毛たいさんと仰つしやるからな。

婆さん、今日はあなたは、わたしの云ふ事に、なか／＼賛成するな。さて之から頂かしてもらひませうぞや。

妾は今日なんだからうれしい。そして、どふやらあなたが、なづかしゆふなつてきた。とくと頂かしておくれ。

どうして、それはいかぬ。婆さんそれがあまへに出来るかへ。出来たら偽物、はける。あれがこれほど耐らへてやつとればつけあがり、嫁の仕打があんまりじや」と、またも邪見がつるふがへ。

どふして、それは、凡夫じやから仕方がない。

婆さん、そんなこと申さふより、御前はまだ御信心が頂けてないから、先づそれから頂きなされや。

へん。年の若いくせに、生意氣なこと、言ひなさんな。妾どまゝ、三十年からの、寺参りて御座います。どの御教化から頂てもこのまゝながら参らせて頂く。だがどふ云ふても大丈夫、御講師様が仰しやつても、御信心一つは間違はぬ。

婆さん、大層怒つたな。これはわたしが悪くかつた、耐らへておくれ。

いえ、なんの怒りはせんはな。しかしあんまり見上げたことば、言ひなさんるもんじやない。

婆さん、いよ／＼これからじや。婆さん、如來様があなたに、直々云ひなさんる。

これ婆さん。そなたの嫁は、人一倍意地が悪いの。何やかやと心配じやろふの。

はい。左様で御座います。

あまけにこの頃は、そなたの息子までが、嫁の肩を持つて、そなたをよろこばにする。ほんに、つらからふの。

仰せの通りで御座います。

自分の生んだ子供でも、他人がまじれば自由にならず、言ふに言はれぬ氣苦勞があるの。

はい、左様でふります。

そんなに、そなたが苦勞してゐるのに、婆さん程果報なものはない、御寺参りは自由に出来る、結構なものじや」と、世間の人から、言はるれば、言はるゝほど、一人の心も知らずして」と、くやしいおもひがいた

邪見憍慢惡業生
信樂受持甚以難
難中之難無過之

勝手ナトコロへ最
オモツケル。

コレガホンマノ御
意見ジヤ。

間イダテガラハ益
ニハタ、ヌ。
ヤンヤ、常陸
山、シツカリ力ガ
ハイル。

婆サンノ怒ツタト
コロガヨイトコ
ロ、コレガ御縁ノ
ツナニナル。

コ、ガ、善知識ノ
言葉ノ下ニジヤ。

遊煩惱林現神通、
入生死圖示應化。

ホンニ、ワタシハ
人ノ知ラナイ苦勞
スル。

如來ノ作願ヲダ
ヌレバ、苦惱ノ有
情ヲステズシテ、
廻向ヲ首トシタマ
イヒテ、大悲心ヲ
バ成就セリ。

同行

婆さん、悪くかつた。時に婆さん、之からあらためて如來様の仰せを、あなたと二人で、共に頂かしてもらふじやないかな。

はい。如來様の仰せなら、なんぼふても頂きますよ。

婆さん、氣げんがなほつてうれしや。婆さん。如來様の仰せは御互によく心を留めて頂かねば、勿體ないからの。

はい。そふとも。兎の毛たいさんと仰つしやるからな。

婆さん、今日はあなたは、わたしの云ふ事に、なか／＼賛成するな。さて之から頂かしてもらひませうぞや。

妾は今日なんだからうれしい。そして、どふやらあなたが、なづかしゆふなつてきた。とくと頂かしておくれ。

善巧方便。

ツラレタ。

耳ヲソバダテ、聴
聞スベシタ。

ソレ、蓮如様が婆
ノ口カラ出サシヤ
ル。

宿善ノ御モヨウシ

さふがへ。

はい。一々その通り、一分一厘違ひは御座いません。どうしてあなたは、左様に私の心の中を、御承知で御座いますか。

婆あはよ、何を今更申すかへ。わしは天眼通てんげんつうで
そなたの心の、隅すみの隅迄見通しじや。

あらまゝ、御はづかしゆふ御座います。

これ婆よ。今わしが、あらためて、そなたに申し聞かす。心をしづめてよく聞けよ。そなたの心を酌みとつて、眞實そなたの味方になつてくれるものは、世界中にたつた一人もないぞよ。現にそなたの實子^{おすけ}迄が嫁の肩をもつてはないか。まして他人はなほさらのこと。

何としましょふ、なさけのふ御座います。
心さびしゆふ御座います。

よいところに氣がついた。さりながら心配するな。こりや婆よ、そなたの眞の味方はこの彌陀^{わだつみ}じや、たとへ世界中の人がそなたを

一々のニアタル、
頗ル奇特ノオモヒ
アリ。

佛カネテ知日シメ
シテ、

日光僅カニ窓隙ヨリ射入ノ感アリ。

聞クが肝要、聞聞
信ナリ。
爲人空曠ノ澤、コ
、ガ人生ノ眞相ナ
リ。

ナリシメ玉フトコ
力ノ御方便ヨリ
ニギザスヨリ
切ナル聞法心
ナリ

衆生安樂我安樂
衆生苦惱我苦惱

捨てよふとも、わし一人は見捨てはせぬぞ。

婆
おありがたふ御座います。

如來ノ例セ
そなたと嫁の折合が、悪いところが原因となり、そなたびいきのこのわしは、ちゃんと外に家一軒立て、おいた、一生涯は安樂に暮せるよふにしておいたぞ。

婆
エ、何と仰しやります。

如來ノ仰セ
乙人のところをよく聞けよ。

そなたと嫁の折合が悪いのは、一世でないぞ、二世でない。互に因果のもつれあい、恨みつゝ、恨まれつゝ、造り重ねし罪業は、四海水もたゞならず。今日が今日迄その通り、わが身から出た錆さびとは云ひながら、ながの年月そなたの苦衷は察するぞ。

れ。そなたと嫁の折合の、悪いところがもとの起り、どふかして樂な身にしてやりたいと、兩手を組んだが五劫の思案、たとへわしでも破りがならぬは因果の法則、それゆへ身代りいたしたが永劫の修行、願行具足は南無阿彌陀佛、十劫正覺の古より、今日今時

彌陀ノ五劫思惟ノ
木願ヲヨグ／案
ズレバ、偏ニ親慈
一人ガ爲ナリケ
リ。サレバソク
バクノ業ヲモチケ
ル身ニテアリケル
チ、タスケント思
シ立ケル木願ノカ
タジケナサヨ。

自因自果、他ヲ恨ム勿レ。

(末本起生の願佛)

(向 廻 願 發)

に至るまで、そなたを迎へたらん計りに、
建てた淨土に待ち受けをるのがこの彌陀レ
や。どうかい婆よ、わかるかい。先程家一
軒と申したのは、極樂淨土のことじや。一生
涯安樂に暮せる様にと申したのは、無量壽の
佛になしてやることじや。

おありがたう御座います、勿體なう御座います。この婆の言ふに言はれぬ心の内を、一々お察し下されて、この婆一人をたすけてやりたいばかりに、御苦勞下されたのでありましたか。この婆を樂にさせてやりたい計りに、御建立^{たて}下されし御淨土様でありましたか。十劫以來御待ち兼ねてありましたか。嗚呼私は今はじめて、頂かしてもらひました。南無阿彌陀佛く。

來ノ仰セ
わかつてくれたか、わしも満足じや。
今わかつてよろこぶそなたよりも、この親
の方は幾千萬倍も増してうれしいぞ。

あゝ勿體なう御座います、相すまぬことで御座いました。かゝることは夢にも知ら

一世勤苦スト雖須
與ノ間ナリ。後ニ
ハ無量壽佛ノ國ニ
生レテ、快樂キヲ
マリナシ。

耳ガアケバ口ガフ
ク、コ、ガ佛智不
思議ノハタラキジ
ヤ。

一念萌命
念佛申サント、オ
モヒタツ心ノオコ
ルトキ。

阿彌陀如來ハフ力
クヨロコビマシマ
シテ、ソノ御身ヨ
リ八萬四千ノ大キ
ナル光明チハナチ
テ、其光明ノナカ
ニオサメ入レシメ
タマフナリ。

(攝取不捨)

目ノツケドコロ

ず、この世のこと、御淨土参りは、別事とばかり思ひ込み、今日が今日迄、嫁や息子
を恨んで計りをりました。こんな邪見な惡
婆を、それほど迄に、呼んで下さる親様と
は、今が今迄少しも存ぜず。あゝ、ながな
が御苦勞をおかけ申しました。勿體なう御
座います。

「だがどう言ふても、御淨土参り一つは大
丈夫」など、横着なこと計り申まして、
ようまゝこの口が裂けなんだこと、あぶな
い事でありました。御慈悲様で御座います。

南無阿彌陀佛、く、く。

如來ノ仰セ
婆よ、でかしたく。もはやそなたは御信
心が頂けたぞ。妙好人じゃ、希有人^{けよ}じゃ、
最勝人じゃ、あつばれく。

南無阿彌陀佛、く、く。

如來ノ御セ
婆よ、でかしたく。もはやそなたは御信
心が頂けたぞ。妙好人じや、希有人^{けよ}じや、
最勝人じや、あつぱれく。

あゝ勿體なう御座います。

南無阿彌陀佛。

如來ノ仰セ
おまへは知るまいが、親鸞と名乗てきたも
蓮如と名乗てきたも、このわしぢやぞ。

婆 あゝ、いかい御苦勞をかけました。この婆
がしぶとい計りに、重ねくの御苦勞を、

如來樣 御淨土
極樂ハタノシムト
聞テモナハニホト
ラズ、彌陀ヲタノ
ム者ハ佛ニナル
ナリ。一念佛要
當流ニハ廻心ト申
スコビアルベシ、日
タカノ心ニテ往生
カナルベカハ、往
日頃ノ心ヲヒルガ
チシテ、本願ヒルガ
ヘ。廻心奉ルハ申
候

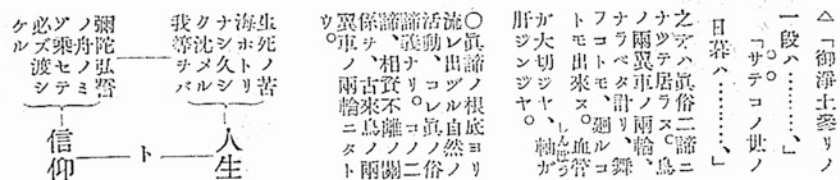
娑婆往來八千度

南無阿彌陀佛

あゝ御寺参りの歸り途、豆腐屋の八平さんと道連になつて、御信心を頂かして貰ふてからもはや三年。……月日のたつのは早いもの、一足／＼が御浄土様が近まる計り、あゝ仕合せもの。

御蔭で嫁も御信心にもとづき、息子もよろこぶ様になつてきた。家業にも勉強してくれる。ほんにわたしは、この世からの仕合者で御座います。

思ひおこす、今より四年前のことであつた、東京から近角さんとやら、髯のはえた坊様がお下りになつて、御演説をなされた事がある。なるほど御熱心な御方、おありがたい御方とは、思つたが、どうやらいつも頂く御説教とは様子が違ひ、却て變なおもひをしたのであつたが、今から思へばあの方こそ、眞の大善知識様、あゝ勿體ない事であつた。その時の題が、人生と信仰とやらであつた。なるほど人生と信仰、今こそ明かに頂かせてもらひます。ほんに思へば、三年前、八平さんから頂かしてもらふ迄は



御浄土参りのこと、世間のことは、全く別事と計り思ひかためておりました。今にしてよくわからして頂きます。世間の事と御浄土の御いはれと、はなれて下さらぬところを頂かしてもらふ事でありました。

南無阿彌陀佛

わたしが三十年から、頂きそこないをしてあつたせいかは知らぬが、どうやらこの邊の爺さんも婆さんも、わしの昔しの御信心と似てゐる様だ。

「御浄土参りの一段はたゞのたゞ、この世のことは苦しひけれど、こゝはしやばだから、凡夫じゃから、仕方がない、因縁と思ふてあきらめるより外はない、あきらめてはおれど、あんまり嫁の仕打がひどひ、しかしこゝを耐らへてゆくのが俗諦門、でける文辛抱をする、たとへ辛抱しきれぬにしても、御助けの方は大丈夫。云々。」

行者コ、ロチトバムベシ、信心アツカラザルユヘニ、決定ノ信ナカリケリ。決定ノ信ナキユヘニ念相續セザルナリ、念相續セザルユヘ、決定ノ信ナエザルナリ。

氣の毒なこと、可哀想なこと。じやと申してあからさまに申せば怒らつしやる。かけひさが大切じゃ。……御縁のある人から一人づつても、八平さんのところへつれて行かふかや。あゝおもしろや。……

如來大悲ノ恩德ハ、身ヲ粉ニシテモ報ズベシ。師主知識ノ恩德ハ、骨ヲ碎キテモ謝スベシ。

以上は當大學入院中の長州の御同胞、奥村多藏老人夫婦の切なる望みにまかせ、佛恩報盡の一助にもがなと思ふて、一つの笑しき寓話にことよせ、自己信念の一端を披露したるものなり。

大正二年二月二十一日記す

彌陀の本願信ずべし

攝取不捨の利益にて

無上覺をばさるなり

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

謹啓、時下嚴寒の候に御座候處、恩師には益々御清康の段、爲法欣喜に不堪候。愚生日頃恩師の御親切なる御教化に感泣致し幾度か感謝し微意を申上度く筆執り申候へども、虚飾難毒の文字のみ演出致し毎度思ひとゞまり居候。本日昨冬求道の爲め急ぎ歸朝遊され候吉井八百一兄より、求道會の莊嚴なる狀況詳しく記せる御郵書に接し、遙かに清き道場の一隅を穢し、親しく恩師の御化導を蒙る心地致し、渴仰敬慕の念に不堪、失禮を省みず撫辭を書き列ぬ候。却説愚生入信後恩誼なる當地在留の三友人（長島清太郎氏、原田勝次郎氏、吉井八百一氏）に御慈悲の程を物語り申居候處、昨年十二月初め吉井兄先づ求道の決意より歸朝相成、同月二十七日夜残れる生等三名長島兄の工場に集り法談中、原田兄忽然慈光に浴され、机上に身を投出して慟哭、身の罪惡を懺悔し、曠大なる御慈悲に感泣遊され、共に手を取り喜び申候。其後は兩人にて長島兄が宿善開發の機運やかなれと念じ居り候處、是亦一月二十七日に非出度く御入信遊され、不思議々々と大悲の善巧御方便を感謝致居候。是迄は會合法談の節、遣る瀧なき親様の御心に付き讃嘆致候へども、了解はなしくだされ候も、眞味を頂きくださる御方無之、爲めに何時も物足らぬ思ひを致し僅かに求道誌に接して未見の恩師、御同明諸君と心茲の共鳴を喜び、大悲の慈光に感泣致居候。然るに今や兩兄の御入信の結果、愚生が言句の終りをまたず、良く眞意を御味ひくださる嬉しさ、例ふるにも無き次第に御座候。兩兄の御入信は兩兄各自の御喜びなるのみならず、久遠劫來待兼ね給へる親様の御満足は勿論、恩師並に御同行諸君も共に御喜びくださる事ならん、特に愚生は一味の二善友を近く與へ給へる大悲の妙恵に感謝致居候。噫是等の幸、之れ皆な求道志を通じて善智識なる恩師にめぐり會ひたる賜に外ならず、外無御座候。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。大正三年二月十二日、寺崎 恕

告白

お悲慈のた、仲に

在米 長島清太郎

拜啓仕候。其後は久しく御無沙汰に打過ぎ、畏れ多き次第に候。先生には益々御勇健にて、吾々群盲の爲め日夜御精勵の御事と推察致し、只、有難さの極みと存じ居候。降而小生事前便にて申上し如く、一時は大變佛恩に感泣致し候へ共、其後は何となく感謝の念も薄らぎ、折りあらば今一度出府親しく御化導に預り度くと存じ候。

此度は米國に滞在中の小生の同窓、彫金家長島清太郎氏より有難き手紙に接し候間、今全文を寫して御高覽に入れ度候。

吉井八百一

吉井君、其後は暫く御無音致しました、私は君の御歸朝後の御動靜、如何にやと君よりの御音信を待て居ました。實に一日千秋の思ひて居ました。數日前御着後第一信の御郵書に接した時には、實に嬉しく思ひました。詳細は寺島君より聞けとのこと、其日も同君を訪ねんと思つて居ましたが、折

に徘徊して來たが、何時も自分自身に心を慰めつゝ其境遇に安んじて來た。普通なれば私は確に世の無常を感じ、自分の力の頼みにならぬ事を感じなければならぬので有つたが、然し私には實際に於て、左様な無常感も起らなかつた。是れは畢竟自分の是れ迄の経験より、人間は余り望外の慾に走らなければ、自分一己の生活には何にも差支へる事はない。世間多くの人は、金が無ければと大に心を苦しめて、種々金儲けの爲め忙殺されて居る。成る程自分とて金が欲しいが、然し自分には餘り過激の勞働をするには、體力が許さない事を知て居る。又金其物は絶對的のものでない。相應の生活が出来る以上は、別に大した必要も無い。左れば自分は適度の勞働を以て氣樂に生活がしたい、即ち小慾主義でやるなれば、別に案ずることもない、と云ふ風の考へを以て居た。然し今から考へて見ると、決して安心して居た譯でなかつた。即ち心安からざるが故に、心常に外物の爲めに動かされて仕方が無かつた。どうかして此外物の爲めに迷はさるゝ心を靜めることは出来ないものかとの考へを起したのが、御承知の如く修養書類、禪書などを手にする動機となつたので有ります。私は修養さへすれば、此不安を靜めることが出来ると思つて居た。其れて少しは其方にも勉めた積りで有つたが、どうも思ふ様に行かぬ。其處で又起て來た問題が、即ち自分は記憶力及思考力が減じた。又奮進努力に要する元氣が無くなつた様だと感じた。其れて是等の起て來るのは、畢竟自分の身體の不健康が本で有ると思つたので、一時は其方に心を奪はれて居た際、靜座法なども小々力を入れたことは、是又君の知らるゝ通り

柄同君より通知が有て、次の土曜日には出市ゆるゝ話し度いとの事で有つた。其れて愈々昨土曜日に同君と會見し、君よりの御信書を拜見する事が出来ました。實に此上の満足は有りません。昨日の感話に君の御手紙を中心として、其れから其れへと進み、感極つて兩人共に感泣致した次第で有ります。殊に君の話により、寺島君の御信仰及び生等の道を求めて居る事を、御同朋の皆様が心から喜て下さつた事を聞ては、身は今萬里遠隔の地に在ると雖ども、心正しく御同胞諸兄姉と相通するの感いたされ。同じ御親の御慈光に浴する諸兄姉なればこそ、斯くも有るなれ。私共知己朋友は少なく有りません。然し心から歡び合ふ友は幾人か有る。否眞に心から歡喜を共にする友は、無いと申して差支へないと思ひます。然るに今日は未だ一面識もなき御方々と、歡びを共にすることが出来ました。私は今日初めて心の友、眞の同胞と云ふ事を、眞實に味ふことが出来ました。實に嬉しくて堪りません。(中略)此度君よりの御手紙を拜して、御返事かたぐし私の入信の模様をも書き加へたい氣に成て來ましたから、以下に少しく其大要を書かして頂きます。

吉井君、君も知らるゝ通り、君の御出立前、私の信仰に對する態度は、君の其れに對するに比して頗る冷淡にして、と云ふよりは寧ろ無頓着にして、信仰などは未だ左迄必要を感じない。左れば若し私が信仰を得らるゝとすれば、其れは今後何か或る實際問題に突き當り、到底自分の力では左右する事の出来ない場合に立至たならば、或は自然と其方に力を入れる様にもなるう。然し私は今迄随分悲運に沈み、不遇の境

である。大體斯様の譯で有りし故、其當時君等から勧められた信仰問題も、實は左程適切のものとは思はなかつた。寧ろ人各々好む所に從て行く可しだなどと思つたことも有つたので、私はどうしても今少し身體を強健にすることが、私自身に取て最急務で有ると思つて居た。然し君等の熱心の勧告によつて何時となく其方に近づいて居る様には思つたが、未だ私には私の考を打捨て、一途に信仰問題にかゝる事は出来なかつた。色々書物を見て居ると、餘程心も動き、成程と思ふので有るが、暫く書見を遠かると、今迄感じて居た事が頭から去て仕舞ふ。其當時は時に熱し、時に冷却すると云ふ風で、兎に角何れとも附かず迷ふて居たので有りました。君の御出立間際に二人で話した時などは、私は君の信仰を渴望して居る様子をみて、大に感心した位で、まだ私自身には君の如く熱心になれんと思ひ、到底こんな事では信仰を頂くなど思ひもよらぬ事として居た。其内に君は歸朝の途に就かれ、今は再會の日を待つより外ない事となつた。私は君の信仰を渴望して居られた様子を思ふ、事が出来ない、そして君は歸國すれば必ず入信されることを信じて居た。從て私も出来得ることならば、君の歸て來られる迄には信仰を頂き、再會の日より樂しく感話が致し度いものだとの念の起たことも有りました。然し未だ本心に求める事が出来ない、相變らず迷ひつゝ、書物だけ見て居りました。其内に既に御承知の如く原田君がいち早く入信(十二月廿七日)される事となつた。然かも其夜は例の如く三人で、私の工場で話して居たので有りました。原田君は其時約一週間前より非常に罪惡感を起され、其

状態最早預けて居なければならぬと思はれたので有りますが、少しの所で苦しんで居られたが、遂に其夜御慈悲を頂くことと成たので有ります。其節は一寸御報申上て置きましたが、私は其夜席を同ふして語て居たので有りますから、同君の入信當時の状態を見ることが出来ました。然し私には只不思議だと感じた計りて、寧ろ茫然として其れを眺めて居たので有ります。少時の後同君はあゝ不思議で有難いと、頻りに感泣致されましたが、私には何にも解るう筈が有りません。其から後で私は兩君からさんく〜と説き聞かされたけれども、何の得る所もない。是程現前に其不思議の状態を見ながら、まだ私自身には疑ひが齊れない。相變らず自見を述べ立てた位で有りました。

其後寺島君は一層の熱心で時々話して呉れたので有りますが、どうも解りません。のみならず同君の熱心に話さる事が、却て私の爲めに苦みを増す様に感じて、同君に會ふことが何となく面白く無く成て來たのです。私の此様子は同君には能く解つて居たと思ひます。同君は其當時は原田君の入信を喜で、暇さへあれば出て來られて居た。初めの内は原田君を訪ねて來られた時には、電話で私を呼て居たので有りますが、私の返事が重いので、後には兩君揃つて私の所に押掛けて來る。斯う成ては私も最早逃げ道が有りません。追々聞く氣にも成り、自然と其方に引き付けられる様な感じがして居りました。其當時、前に原田君に感化を與へ、罪惡感を起させた曉島敏先生の著者「佛教入門」を借讀して居りました。此書を復讀致して居りました内、何時とはなく自分の疑ふて居

た事が解て參り、讀めば讀む程深味の有ることを感じて來ました。其れて遂に私は理解的に信仰に入る順序が立つて來ました。即ち先づ自分と云ふものを省察して見ると、どうしも自分なるものが無く成て來る。即ち自分は無我で有る。無我の自分が生存することの出来るのは他力の恩恵に依て有る。左れば其恩恵を受けて居る自分は、其れを受けるだけの事をして居るで有ろうかと考へて見ますと、なか〜其んな事が出來て居る所では無い。自分は是れ迄そんな恩恵に依て生存せしめられて居る者など、云ふ事は知らなかつたから、自分の是迄造つて來た事は、悉く皆自分自身の爲め、即ち自分を利する爲め有たと成て來る。左れば自分は是迄恩恵を恩恵と思はず、平氣で良い顔をして居たのであるから、實に恩恵を我物顔に盗んで居た罪人で有ると云ふことが解て來た。從て罪惡感が起らねばならぬ事と成て來た。既に自分が罪人で有ると解て來ると、其罪人の自分が今尚生存することの出来るのは實に不思議だ、有難い事で有ると、此處で感謝の念が起て來なければならぬ。所が實際に於てなか〜罪惡感も恩寵感も起らない。私は此處迄來て非常に苦しんだ。理解的には自分の罪惡で有る事を充分解して居るので有るが、どうしても心から罪惡感が起らない。

丁度其當時原田君は冬休みに紐育に出掛ける事となつて居たので、同君はどうかして私を早く信仰に入れたいと、其頃は時々來て呉れたので有る。私は原田君の様子が大幅に異なり、又同君の話す事が前と全く異なつて來たことに氣付て來た。或時同君の話に、自分は是れ迄も随分吞氣で有つたが、

御慈悲を頂てからは心配が無く成て、一層氣樂に成て來た、實に嬉しくて堪えらんと、眞に嬉しそうな様子が顔に現はれて居るのを見て、私もあんなに成り度いものだと念が自然に浮んで來た。尙同君は語を續けて「寺島君などは獨りて居るのだから、他から見ると淋しい様に思はれるが、決してそんな事は無い。あれで何時も楽しく暮して居るのだ。其れて先生は君の性質を知て居るから、あんなに勧めるのだ。どうか君も早く氣樂に成り給へ」と言はれ、ニコ〜して居る様子を見て、何となく羨しい様な感じが出した。所で私は僕も必ずと言いつける譯けには行くまいが、君の紐育に在る間には、是非君を喜ばせ度い積りだと云ふと、同君はどうか頼むと力を入れた語を残された。もう會へまいと云ふので、愈々暫時別れる事になつた。私は信仰が得度いと云ふ念が、日増しに強くなつて呉る様な感じがする。其れてどうして罪惡感が起らぬので有らうかと、今は此念を去ることが出来なくなつた。求道誌上の御話や、又告白などを見ると、罪惡感は自分で起こせるもので無い。其起そうとしても起らぬ、其れが可愛想だ見て居られない、助け通さねば置けぬと云ふ親様の御心を頂けば良いのだと申されて有る様だが、其れがどうしても左様に甘く頂けない。私は是處で實際弱て仕舞つた。然し今更駄目だと云ふて打遣る事も出来ぬ。實に進むことも出来ぬ。退く譯にも行かなくなつて來た。一月廿日(火曜日)には寺島君が、原田君の出紐前に今一度會ひ度いと云ふので出て來られた。此晩も二人連れて私の所へ來て呉れた。何時も同様熱心に話されるので有るが、矢張り解らぬ。其夜は私の思つて

居る事を色々と話した所、兩君共に其れ程明かに理解されて居て未だ頂けぬとは全體どうした譯だ、噫々情けない、其處だ、其れて良いのだと言はれるけれども、一向頂けそうにもない。私は今晩こそはと思つて居たのだが、矢張り駄目で有つた。其晩は餘程熱して居たので、寺島君は遂に歸れなく成て仕舞ふたので、私の所て宿る事となつた様な次第です。其夜は餘程遅かつたから、歸宅後直様床に就て、寺島君は原田君の前と餘程變た事を感歎され、どうか君も早く入信して呉れ給へ、此頃は原田君と二人で君の入信すること計りを念望して居るのだと言はれた。私はもう何とも答えることが出来ない。只ボンヤリして、左様ですか、噫々實に不思議なものだと相變らず考へ込んだ。同君は其れより時を移さずスヤ〜と眠つて仕舞たが、眠られぬのは私。今晩は寝ずと考へて見ようかとも思たが、もう幾何考へた所て歸する所は一つに成て仕舞ふ。考へ様も無く只口惜しいと思ひつゝ、目覺むれば早や起きねばならぬ時刻だ。朝飯後寺島君は早く歸られるかと思たら未だ歸られない。例に依て工場に參り兩人對して座を占めた。

今日は朝がけの御法談、昨夜に續て種々話して呉れたが、相變らず解らない。先生熱心なのは驚かざるを得ない。其れては同君の言はれることを丸々信じて受けければ良いのである。又私も受け度いのだが、其れが左様甘く行かぬ、結局昨夜同様どうすることも出来ない。其處で私は同君に向ひ、どうか君次の日曜迄考へさして下さい。私は是非解決しますと言ふたので有つたが、同君は其れ迄待てぬ、もう一寸の處だ

から頂て呉れと言はるゝ。素より頂き度いのだけれども頂けぬ。仕方が無いので遂に同君は十二時頃の汽車で歸られた。私も先生を喜ばせ度いのだけれども、仕様が無いので亦々考へ初めた。然し幾何考へた所で相變らずだ。其日は別段仕事もせず、終日ボンヤリとして過した。夕食後手紙を出さなければならぬことがあつたので再び工場に歸り、十時過ぎ歸宅して見ると實に意外だ。寺島君の名刺が机の上に置いて有る。先生又今晚も來て呉れたので有らうか、實に熱心なのは恐入ると思たが、心から同君の御心切を受けることが出来ぬ。其處で私は自分を疑つて見た。自分は性來物に感じ易い、又情にもろい質だと思て居た。是れ迄は人に心切なことをされると、思はず涙のこぼれる様なことも少なく無かつた。然るに此頃は全體どうしたので有らう。寺島君が心切に、然かも人生の一大事信仰問題に就て、あれ程熱心に心配して呉れるのに、自分は其れを本當に心から感謝することが出来ない。實に妙だと考へて見ても、どうしても有難い様な感が起らぬ。翌朝は寺島君に不取敢禮狀を出さなければならぬと思つて筆を取たが、どうしても本當に同君の厚意を受けて居らぬのであるから、感謝の文を書くことが出来ない。私は手紙を書くに是れ位苦しい思ひをした経験が無い。仕方が無いから自分の苦しんで居る點を少し書て、最後に形式ながら御禮申上げるとして送た位で有る。其れから考へて見ると、今迄人に送た總ての禮狀は、本當に心から感謝の意を述べたのでは無かつたが、然し矢張り感謝の念が起らない。實に罪惡極まると思たが、心から罪惡感が起ら無い。兎も角其當時は日夜罪惡

と感謝の念を起さう／＼苦しんだので有りました。本を見ては考へ、考へては讀むと云ふ風で、何か其念を起す機會を待やう／＼と試み、遂に土曜日の深夜迄數日續けて考へたが、何にも得處なくして終つた。明る日曜日は前日約した如く寺島君を訪ねて、今日迄の經過を話さなければならぬ。然るに何にも得た所が無いので、同君に合はず顔が無い思ひて、其夜を過し、日曜の正午頃不本意ながら御断りに行く積りて、澁／＼同君を訪ねた。同君は私の來るのを今か／＼と待て居られたのである。其處で同君の話の聞て前夜訪ねて呉れた譯が明かに解た。其れは彼の夜、即ち寺島君が私の所て宿た夜、原田君は歸宅せられて後一書を認めて寺島君に送られたのである。其れは長島があれだけ理解して居て、罪惡感が起らぬ管が無いと原田君自身考へて述べて、寺島君の所感を尋ねたので有た。然るに寺島君が手紙で返事しても解り難いから、一層今一度出掛けて話した方が良いの考へから、先づ原田君を訪ね、其れから轉して私を訪ねて呉れたので有た。實に御心切有難い次第で有るが、私には本當に有難く心から感ずる事が出来ない。私は其時に答の仕様が無かつた。只だ早く御 悲を頂き度いものだ。左すれば兩君の御厚意を受けることも成り、旁々心から御禮も申上げることが出来る。是れ丈同情して下さる心が受けられぬとは、實に申譯も無い事て有ると、少時は考へに沈んだ。話は其れから其れへと進み、夜九時頃に成た。色々私の今迄心得違ひて有たと感付いた事などを話して後、前夜色々書物を見て居た中に、近角先生の御著「人生と信仰」の内「犯罪心理と信仰」の章にて、囚人の

例「眞實親の慈愛に氣付た時―自力を認むる間は佛の慈愛に氣が付かず―懺悔心」此四段を通讀した時には、別に深く感じた譯でも無かつたが、何となく少々明かに成て來た様な感ながした。

其とき思い浮んだ事は、成る程左様である、若し其囚人が親の愛に氣付いたなれば、直様親の下に走せて是れ迄自分の不心得て有たこと、自分の惡るかつたことを謝するより外はない。親は是程惡い自分を矢張り子と思て呉れて、自分の歸るのを待て居て下さるのかと思ふ時に、只有難いと感泣せずには居られない譯だ。此處が眞實親の慈悲に氣附た時だと思つて、是れて私自身の身に味つて見ると、こう云ふ風に成て來た私は生れて以來實に數へ盡すことの出来ない程兩親に厄介を掛け居る。實に／＼深き御恩に預て居る。當米國に參て以來既に十ヶ年の歲月を経た。今此間丈の事を考へて見ても、自分は渡米以來何一つとして兩親を慰める様な事が出来て居ない。のみならず自分は身體の怯弱で有た爲め、兩親を慰める處か多大の心配を加へ重ねて居るのである。所が自分の考へては、何時か自分の力で、時至れば充分慰め喜ばせることが出来るものと思つて居る。然るに中々左様思ふ通りに行かない。相變らず今も尙心配を掛けて居るのである。然るに私の兩親は、私が斯く何にも心を安め慰めることの出来て居ない事を咎めないのみならず、却て常に心を込めたる慈愛に満ちた手紙を以て、私の身を氣使ひ慰めて呉れるのであります。今で有たならば噫々有難いと、感涙に咽ぶので有るが、私は未だ此時は其慈愛に眞に氣付く事が出来なかつた。私は未だ

自力を頼て居るのである。此自力が取れれば良いのであると思たけれども、其れを取り去る事が出来なかつたので有ります。其れで若し肉身の親の恩と云ふ事に氣付く事が出来れば心靈の御親の御慈悲も頂くことが出来るに違ひ無いと理解したので有ります。是れ迄とても右と同様の感の起らねばならぬ例話には度々接したと思ひますが、其夜は特に私をして斯く感ぜしめたのであります。

其れで其時は此所感を同君に述べて見ようと思つて、少々斗り話しかけますと、誠に不思議にも是迄に無き異様の感に打たれ、我知らず泣き崩れん斗りて、少時は話す事さへ出来ない事に成て仕舞ふたので有ります。其際同君は私の此様子を見て、君其れは實感だよ、君頂けたて無いかと言はれたので有ります。私も餘りの事に不思議だ、どうも實感に來て仕舞た様だ、僕は只自分の所感を述べる積りて有たのが、あんな具合に成て來たのだ、どうも不思議だと合點は行かなかつたので有ります。其處で同君は、今君は親の恩が眞實に解かつたので無いか、肉身の親の恩が解て、御慈悲が頂け無いと云ふ事は無いでは無いかと言はれた。私も前から左様思ふて居たのであるから、其様で無ければならぬ譯だと思ふたが、どうも其れが本當に受け取れ無い。何だか頭が滅茶滅茶に成て仕舞て解結が付かぬ。其内餘程遅く成つたので、私は同君に向ひ今晚は是れて歸らう、何にしてももう愈々近付た様に思ふから、今週中には是非解結を付けると言て別れた。歸途色々考へたが、どうしても合點が行かぬ。兎も角不思議の現象で有た、どうやら本物に成りさうだと、幾何か嬉しい様な感

もした。帰宅後も少時考へて見たが解らぬ。翌朝工場に出て仕事に掛てから、ふと前夜の事を思ひ出して考へ初めた處、又々前夜と同様の感に打たれ、自分の今迄の考へが丸切り間違て居た事に氣付き、吾知らず間違て居た悪かつたと繰り返して涙に咽んだので有た。漸くの事に氣も落付きて來たが未だ其理由が解らぬ。其内に工場であるから色々な人が遣て來て、解決が着き切れぬ。今晚こそは家に歸て決着を付け様と思ひ、早々歸て行たが、實に意外千萬だ。なんぼ思ふたとして考へたと何の感じも起らない。却て平常よりも心が落付かぬ様で、本を見ることがさへ出來兼ね、全く何が何やら解らなく成て仕舞た。嗚呼、駄目と打遣ることも出來ず、全く手の出し様が無い。いつそ床にでも這込つたら良いかしらんと、近來稀なる早床に就たが、矢張り相變らずだ。其れでも未だ考へて居たが、少しは勞れても居たものか、何時の間にか夢の中のひとと成た。翌朝例に依て仕事を初めてから又思ひ出したが、昨朝の様に感ぜられ無い。デドモ増々合點が行か無く成て來た。其内にふと氣付たことは、是れは甚だ間違た考へをして居た。若し自分の力で彼の様な感が起るので有たなれば、何時でも思ふ時に自由に感ぜられねば成らぬので有る。然るに昨夜と云ひ又今朝とても、昨朝の様な感が起らない。して見ると是れは自分の方で起せる感じて無い、彼の様な不思議な感が自分で起そうとして起せるものか。又自分の如き汚れた心に、あんな殊勝な感が起ろう筈が無い。是こそは今迄久しく探し求めて居た如來の御計ひで有る。即ち眞實の御親の御心が私の心に貫き届て下さつたので有た。實に

有難い事だと思つたが、其際は別段心から有難い様な氣もしなかつた。然し愈々解て來たと思ひ、今晚寺島君を訪ねて話をすれば、其間に必ず頂ける事に違ひ無いと思た。が同時に此處で罪惡感が起て來たのである。

其れは今迄寺島君があれ程心切にして呉れたのに、時には同時に會ふのさへいやな氣持ちがした事も有る。然るに今自分が御慈悲が頂けそうに成て來たからと云て、今度は此方から押掛け行くなどは、實に非道い量見だ。能く／＼自分は非道い我儘な奴で有た。然し是れ程我儘、又心切を心切とも思はぬ無禮極まる奴を、今迄嫌ひもせず交際して呉れたのみならず、能く／＼彼の様な心切を盡して呉れたものと、初めて心から同君の方に向て謝罪し、且つ厚情を感謝した。其れを初めとして、其れから其れへと考へ及ぼして行つたが、自分の他より受けて居る恩恵は實に莫大なもので、到底量り知ることが出來ない。然るに今迄は其恩義を自分で返せる積りて居たので有るかと思ふと、實に間違ひも甚しい。自分は今恩恵、即ち御慈悲の唯中に埋められて居ることに氣が付た。從て自分の是迄の思慮と行爲の總てが、丸切り間違つて居た事が一時に解りて來て、實に空恐ろしい感に打たれ、遂に泣き倒れた。恩寵と罪惡の兩感に交々に増り積りて、胸も張りさけん斗り、實に其際の感想は到底筆に表すことは出來ない。只不思議と云ふより外形容の辭も有りません。斯くて此世の中に、自分程悪い奴は無いと氣付かして頂いたので有ります。

其夕方を待て寺島君を訪ね、右の次第を話したので有りま

すが、同君の喜びは一方でない。非常に喜んで呉れたので有ります。噫々有難い。(此日は一月廿六日)既に自分は假へ様の無い大罪人で有ると自覺されますと、自分は其れに對して如何なる刑罰にも從容として服さなければならぬ、到底自分は助かる事の出來ない者で有ります。然るに是處に不思議にも此私の如き罪惡深重の者を目當てに助け救ふて下さる大慈の御親の御在します事を聞ては、今は只此御親にすがり外は有りません。私は此身が如何に成り行くと、決して後悔しません、只御親の御計ひに御委せ申すの外無いので有ります。

歎異鈔第二節の

親鸞においては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらす可しと、よき入のおぼせをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり云々。

の絶對信の一節は、實に私の現在の信念で有ります。畏れ多くも私は親鸞聖人の御信仰を其儘頂かして下さつたのかと思ふと、誠に有難くて／＼堪りません。南無阿彌陀佛。

吉井君、大要と思たが大分長くなりましたから、今日は是れて置かして頂きますが、如何に私の爲めに寺島君及原田君が心配して呉れたか。否如來の御手引きの如何に廣大なるかを味ふて下さい。(中略)尙君ももう今頃は信仰が頂けて居るだらうと思ひますが、萬一頂けて居らぬとしても、遠からず頂ける事と信じて居ります。噫實に不思議だ。吾々四人は何と云ふ御縁の深い者で有つたろう。以前より何時とはなしに交を結んで解けなかつたが、今は又眞の心の友となつた。もうどんな事が有ても決して離るゝ事は出來ない。死して行く後の

世迄も相變らずだ親友とは、實に吾々間の事を云ふた言だと、深く感ずるもので有ります。此頃では何も彼も不思議／＼で實に嬉しき事の限りも有りません。尙又御手紙に依れば、追々道に志す者も出來て來る様で、誠に結構の事と思ひます。

殊に田難先生が(之は香川縣の學校時代の教師、米國より歸朝後今は築地の工務學校に在職)求道の御志念有ることを聞て、誠に嬉しくて堪りません。私も先生に是非手紙を差上げねばならぬ事となつて居りますが、何卒、君先生を道に入れる様御導きして呉れ給へ頼みます。其他既知朋友は勿論、何人でも話に機會があれば、どうか一人でも多く道に入れる様導て呉れ給へ。人生に此有難い信仰を頂かずして暮せるもので無い、噫々有難い君呉れ／＼も御頼みするよ。尙々近角先生にも御手紙を差上げ度いので有るが、君は既に御教化にも預りて居るので有るから、どうか一先づ君から僕の入信した有様をも御話して、僕の喜んで居る事を御傳へして呉れないか。御縁があれば自然に先生へ愚書を奉る様にも成る事と思ふて居る。何卒宜しく御頼み申上ります。以上。

◎選擇集講話(希聲堂遺稿)

故 高富士圓治師演

幼より布教に志して僧侶となり、廿三歳更に發心して眞宗中學に入り、不幸中途にして不治の病を得つゝ、最後は煙草賣造して獨力學費を作りつゝ、遂に四十三歳眞宗大學を卒業し、之より多年抱懷せる處々實現せんとして、計らず宿願の爲めに亡くなれたる故高富士師の遺稿の一端を、せめては世に傳へるために、師の生前の底義なる平松師が雜誌「法語」にのりたる遺稿をまとめて出版せられたが本書である。一冊の本書も斯く甚なかりし師が一生忘れ得ざりし愛敬的精神の遺影たるを思ふて見ると、語句の末にも故人の心がある思ひがして、今更其人が惜しくならぬ、單に講義としても又平明分りよく、たしかに初めて「選擇集」を頂く人には好き手引きである。(代不詳、發行所、府下品川、法話發行所)

時

報

求道講話概況

求道學舎日曜講話

(聴講 甲 記)

三月十五日。午後。先月二十二日講話の後、先生は福岡大分兩縣並に郷里へ傳道の爲旅行せられたれば、三月一日及八日二回の日曜講話は遺憾ながら休會となれり。されば本日又振りに再び法縁に逢ふことにて、聴衆一同喜びの色一しは深きを覺えぬ。例刻講話開始。此日は恰も亦第二回慶信會に相當せる事なれば慶信の文字に因みて『華嚴經』の「與諸如來等」の語を講題として、信仰の深き味ひを述べ、殊に本日通過來の傳道中に得られたる種々の感想を披露するを主とせられたり。先づ此度第一に訪はれしは福岡なる具島家に於て、同家の老夫人は昨年先生が彼地方に傳道せられし節深く御慈悲を蒙られしが、其後病を得て本年一月遂に身まからるゝに至れり。此夫人は同家今日の盛運を致すに與かりて力ありし人なるを以て、主人は痛く精進の夫人に先立れしを悲しまれ、先生を請ひ、亡夫人を弔し、且つ家人と共に再び親しき法雨に浴せんとせられたるなり。扱先生此家に赴かれたるに、主翁悲歎する方なく、此時先生は不圖過般某氏が、四十一歳にして、八子を養ひ、夫人に先立たれたる不幸の物語をなし、僅に慰さめんとせられしに、主翁は「壯齡の人の不幸は猶忍ばるべきも、老後のかゝる不幸は如何ともし難きに由なし」と語られし由。いかにも人は其々々々として、自己が現在ほどの悲痛はあらざる譯なれば、他の不幸なる例をあげて其心を慰めんとするは全く無意義にして、其一人々々の陰方盡きたる心に對し、滿福の同請を注がせ給ふ大悲の喚聲を傳ふるに非んば、眞實の安慰を與へがたき事を先生自ら今更の如く感ぜられたりといふ。

されどこれにつきて注意すべき事ありとて、又福岡にて法を傳へられし一婦人の例を擧げらる。其婦人は多くの兄弟中不治の病氣にさへかりて最も不幸なり、先生に對し「私は兄弟中最も不仕合の者なれども、佛はかゝる不幸なる者を御見捨て下さらぬ」と喜で居ります」と述べらる。されどこの「不仕合者」を御見捨て下さらぬ」だけにては眞の安心とはならず、其不仕合であるところを殊にあはれみ給ふを頂けば、不仕合なるだけ夫れだけいふたのもしきにあらざるや、

第二求道會土曜講話

と、此點を際立てて説き諭し給ひしかば、其婦人深く御慈悲に感泣されたりとぞ。猶ほ具島家に於て令息諸氏を初め、幾多の方々の法縁につき、佛智不思議を讃仰あり、福岡にても新に法縁を結び給ひし人多かりし由なるも、詳述する能はず講話はこれより進みて佛の眞實が我胸中に徹するときは、最早我等の不實が氣にかゝらず、更に又我等は自ら不實をなし得ざるやうになる味を丁寧に指示されこれに就いて今同傳道先きに於て起りし著しき例を述べ給へり。そは一夫人年久しく俗諦の重荷に苦しまれつゝありしが、昨年先生の眞俗二諦の交渉の講話をき、大に喜ばれ、愈々俗諦の守りがたきを思ひて偏へに佛の慈愛に感泣せられつゝありしが此度先生を訪れて、其喜びを述べ「私の俗諦の出来ぬところをあらため給ふ本願の尊きこと。そのあやかに告白せらるゝところ、一點の滞りありとも見えず。されど先生は夫人がかく喜ばるゝに拘はらず其の眞諦の力、俗諦の眞生活に現はるゝ上に於て余りに弱きをいふかしく考へられたれば、此點につきききしに注意せらるゝといへども、夫人は未だ氣づかぬ、色なく、夫れには實に餘義なき事情あり、さればこそ愈々御慈悲を蒙らうと思ひます」ときつぱり答へられ、先生の道徳愈々ばけしきなるにつけ、傍人又見るに忍びず、夫人の爲め辨する者あるに至れり。されど先生は、懸念猶絶えず、遂に「貴女は予が貴女の胸中を了解せぬと思ふべけれど、若し眞實貴女が佛の御慈悲に頭下り居らば、予が言ふところの對したるハ、い」と受け答へが出来るべき筈なり、然るにさばなくして貴女はたゞ胸中を理解せられんことを希ふことと見ゆるは如何にぞや、予がかくして云ふは、眞實貴女の上を思ふが故ならずや」と迫り給ひしに、かの婦人始めて從來の聞きやうの淺かりしに氣附き出されしかば、先生は更に語を進め、佛の慈悲はたゞ可愛相と云ふだけか、そのよきことのできずして、苦しむ様を御覽せられ、何とて其苦しみをかき與へんと御苦勞下さるゝに非ずや。五劫思惟の御苦勞は實に貴女一人が爲に非るか。何ぞの御慈悲をよそにして、獨り眞實の心を持つるや」と語り給ひしに、夫人忽ち頭をうなだれて號泣し、深く從來の頂きやうのなほそかなりしを懺悔して廣大なる恩徳を謝せらるゝに至り給ひしとぞ。此の御話しは殊に有難く、聴衆一同亦袖をうるほさねばなりき。講話後は更に慶信會座談に移り、先づ先生は、木葉靜子氏の芽出度き往生の有様を物語り給ひ、又一老女の喜びなき、幾分懸念ある點を懇ろに話し給へり、猶ほ其後第一回慶信會に講話せられたる「未だ鈔」慶信房に對する聖人の御返書を講義せられ、時漸くうつりしかば、散會を宣し、聴衆一同共に佛前にて東方の佛を拜禮せられたり。

三月二十二日。晴。天朗かにして風暖かく、庭樹驚蟄をきくこと頗りなり。唯佛眞」といふ聖德太子の遺訓を講題として、念佛のみぞまことにとおはし「す」といふ祖語に及び、太子并に祖師の信仰の概一する趣きを詳述せらる。

(聴講 乙 記)

三月十四日。先生には九州郷里へ三週日の傳道を終りて今日新橋歸着、直に臨席せらる。強き降雨にかゝわらず、待ち兼ねし一心の聴衆多く集集せり。今日「如來は即ち眞實なり」と題せらる。涅槃經の御言察なり。聖德太子の御遺言に「世間虚假、唯佛眞實」とある。日本文明の親ともいふべき太子が、世間虚假の上から偉大なる御事蹟あるにかゝわらず、世間虚假と仰せられたる。世間虚假といふは即ち世間の全く當てにならぬことである。人間は各自己の望を以て人生に努力して行くが、その望みなるものが結局當てにならぬものである。假令自身の希望通り成就することありても其の爲め骨折つて居る間はそれだけの意味があれど、成さんと思ふことを成して、却つて人生の問題、生死の問題に突き當つた時は、人生の事尤て意味を見出し得ない様になる。人間は自分々々が特別の悲み、苦みを以ち、そして各、自分の悲みを取り返へしがつかつて嘆いて居る。人が如何に悲にふても感めることは出来るものではない。そしてその嘆くが如何にも無理ないことである。然るに佛に於てはしめておしよ、人生のこの當てにならぬことをしめてある。ところが誰でも人生のひどい悲嘆に遭つてみると、悲哀に閉ざされ消極に陥つて、その消極を救ふ眞の積極の味が頂き難い。この世の當てにならぬこと、吾々の不實であること、如來の御深切とが相違ひになつて居て居る。如來の思召は頂れぬ、如來の御眞實は吾々の不實を離れたものではない。如來の御眞實は私の不實の根性を知り抜きて、其缺點が可愛相との御深切を以て向ひ下さるの、この私が遂にそのお見捨てなき御眞實の爲に安心出来るのである。斯く不實のものが、遂に有難う御座います。後生助け給へと頼むまて見捨てないといふ御座が、南無阿彌陀佛と頼まんとを救ふとの仰せである。そして斯るものをよくよくと頂いて見れば、自分が實に惡者かつたことが判る。すべきことの出来ぬのが實に淺聞敷い、その出来ぬものに飽くまで眞實にして頂くのであやまり果てるのである。進むも留まるも不實の事しか行へないものが、御見捨てなき御深切を頂いて、あやまり果てた時、始めて人生に眞實の立場を生ずる。土農工商ことなき人生なれど、御見捨てなき如來の御慈悲に服ふ、働きがされて頂ければ、自分の淺聞しきことを悔愧しながら、御慈悲を喜び、人生のふのては無い。御慈悲を頂いた時がまこととならぬ人生の命の終つた時である。而して其の上からは婆娑に居りながら有難い御慈悲が満ち／＼と下さるのである。講話後、黄葉氏は兼ね／＼御慈悲を喜んで居られた煙なる人の病篤きを爲め歸國しその方に念珠を與へしところの方があたらしく感動して御慈悲を頂かれし様を語つて喜ばれた。

三月二十一日。春陽の晴れ間を時々小雨降る。先生には下野二日の傳道中御親戚の訃音に接し、去る十七日俄に御歸國のころ、今朝御歸京ありたり。

題は「利他眞實」である、講話前一人の方が自分が眞に人に善くすることが出来ない、また心から佛を頼むことが出来ぬといはれしを例にとらる。抑々こちらから善くすれば人も善くして呉れる、こちらから頼めば向も引受けて呉れるといふ事は分る。多くの人が凡て此の考え一つで人生に處して居るのである。然るに今自分が善くして行くことが出来ないといふ言は輕く聞いてはならぬ。深い經驗の言葉である。この方は日露戦争最後の戦に、殆んど戦死し焼いてしまはれたことになつたのを、從卒がまだ死にきらわぬからとて介抱して呉れたので生き復つた。それで自分が死すべきであつたのが助かつたから、飽くまで人の爲めに盡さうと思ひ立つた。然るに命を捨てた心でやつて見るに、ほとんどの事が出来ぬといふのが苦心で法を聽きに來られた。人道の爲めに自分を捨てて盡す決心しながら人の出様によつて自分を捨てることが出来ない。人が家庭問題で苦しむもの、讀つて行けば善い、いふことは分つて居るが、讀つて行くことが出来ない。善くすれば善くして呉れるのであると知りながらその善くするといふことが出来ない。善くするに、突き當るのである。私共が悪いといふところまでは氣がつくが、それなら其の惡が止められるかといふにやめられ無いのである。すると善くすればよいといふ思召し下さるのである。利他といふ他は、私共のことである。利他といふ佛の方から私共を眺めた言葉になつて居る。非常な有難き言葉である。佛の方より其の行き詰つた私共を造る道なき思召し下さる、力強い言葉である。ところが動もせずと頂き儲が淺い。佛は悪いものにも善くして下さるか、こちらから頼まなくも助けて下さるといふだけに於て居る人が多いのである。人間は不實なものに眞實にするものが出来ないに、佛は其の不實者が可愛相とある眞實である。それ一通りてなく如何なる不實なものにも飽くまで眞實にして、その御眞實の分るまて見捨てぬといふ御眞實である。眞のやるべきなき御眞實に出會つて見れば如何なる不實なものにもよくよくと御眞實の程をかざるをえぬのである。これ程の御深切を聞いて見れば、如何なる淺聞しきものも、一心一向になるのである。斯く頂いた心持をいふと、斯く迄不實を見抜かせられての御慈悲であれば、自分の悪いことが氣にならぬ。本來善くしやうと思つて居たのが悔懣であつたとまで氣附かして貰へば、御深切に對して、善うしやうのどうしやうの思ひが無くなりおのづから其の御眞實一つにあやまりはていふことにせすには居られざる廣大な御力が現はれて下さる。云々。講話後、此日は彼岸の中日につき、特に佛前に勤行あり熱心なる人々例により居のこりて教へを乞はる。

三月二十八日。題は「世間虚假」なり。世の仲の事は假りなるもの、空なしものである。生老病死には誰も悩まされ、世間は畢竟虚假である。死といふことは人生の虚假不實を明かにすることばない。吾々は死といふ事を事實を以て示され、一應は考へるけれど、眞に自分の上に考へることが仲々六ヶ敷い。我々はまた生きて居る事で行き詰る事が多く、そして此の世が思ふ様にならぬ爲めに

死んで了ふと思ふ心さへ起すのである。死の問題はたしかに信仰に入る道筋であるが同時に生きて居る間に我々の見てが眞實でないといふ事も亦大問題である。一體不眞といふ事は眞實に照した時に分るのである。親のまことと聞くまでは人に吾々がまこととてない事は分らない。夫れが何ういふ風に分るかは、人間がまことにして行かう、善くして行かうとして行く上、いふ何んか苦みが出て来るから分る。始めは誰にも人に善くするが、夫れに對し、人が善くせず、了解せぬ。その時人を不足に思ひ隔てる者が起り、こゝに行き當るものである。そこで最初には是が當り前の様に思つて居るが、然るに人が善くしても、自分が悪くせぬ様にして行かねば人生の平和は得られない。ところが人間のする事は本来人が善く思つて呉れることを欲して人に善くして居るのであるから、人が善く思つて呉れない事になれば、もう何うしても善くする事が出来ない。こゝが附き出せば細々吾々がどうもまともでない事が分り出るのである。すると我々のする事はほんとの事は一もない。處が多くなるといふ事が分らないのである。で、そこで何う御慈悲を頂くか注意すべきは世の仲に罪深い事が氣附いても、佛様は罪深いものを助けて下さると軽く思ふて居るものがある。初めからお助けな佛の役目の如く思ふて居るものである。然うては本來我心は善く仕てゆくのが當り前である。然に其すべき當然の道が我々に出来ず空しくおつる事を佛がれて見込んで下されたのが御大悲の本である。而して其の者の爲めに飽くまで善くし遂げて下されたのが佛の眞實である。即ち吾々の結局虚假不眞が見捨てられぬとあるが本願の御眞實である。悪いものが可愛相とは人間界の言葉で無い。而して其の遂にあやまりはて、不眞ものが見捨てられぬといふ深い御眞實の爲めに遂に此方の不眞の齒がたふなくなり、遂にあやまりはて、その御眞實を頂かざるを得ぬやうになる。云云。

◎御大典と眞宗

佛教學會編輯

本書は眞宗大派本山佛教學會にて、今秋御即位の大典を迎ふるに對し、眞宗信徒として信仰上如何なる用意あるべきかを知らしむる爲め、法主臺下の右に對する御消息を根底として、普く大派知名諸家の所見を集め、佛教講義録に隨事對列として頒たれたものである。各々所見を吐かれた諸家二十八名、即ち大派に屬する諸家は殆んど網羅されたれば、今の大典の大御代に對する欽家としての諸家の意見を聞かんとする者には、最も好適の本である。殊に巻頭に短冊形に印刷したる法主臺下の古都に住む身に紅葉する梅の香に待たるの御眞筆の一句は、御大典を待たされ給ふ臺下の思召の程上頂かれ、一入御有難い。(非賣品 發行所京都大谷派本願寺内佛教學會)

蓮如上人の歌

宗意編の驚森舊事記は元祿六年十二月洛下雲晴堂沙門宗意書之と奥書がある。そのうちに冷水の道場へ了賢が蓮如上人の下向を乞つたのに應じて文明十八年の春山科から出かけて行つてそのときの紀行日記として引用してあるもののうちに以下の歌がある。

和泉なるしたての池を見るからにこゝろすみぬる海生寺の宮

河なへの瀬々の浪もや水高く遠く吹れてなかるなりけり
音にさく清水の浦に船に乗りて岩間かくれに見ゆる島々
藤白の山や小島をなかわればたゝ布引のしろさはま松
此島に名残をもしみまたかへり月もろともにあかす夜すから
わさ出る清水の浦を今朝ははやなめて歸るあとのこひしさ

和泉なる吹井の浦の濱風に船こぎ出るたびのあさだち

文明十八年三月十四日記之(此御眞筆始在洛陽順興寺今時者有大阪北濱之在家)

その調の緊張して言葉の自由にして眞實なるところは到底古今新古今流のもの、足もとへも及ばざるところである。歌人としての家光について、蓮如上人の歌を見るを得たことはわれらの藝術的批判に確信と慰安と現代の内的批判を重んぜぬ舊國家者への態度を決せしむるに勇氣を與へるものがある。『人生と表現—三井甲之氏—』

勸學 利井鮮妙師述

肖像 絶筆 辭世 寫眞

增補 信仰清話

▲第二版

實價五拾錢 小包八錢

本書に收むる百章言々彌陀の大悲を傳へる處すべし。本年一月和上

句々恩海の情味を擲す。本年一月和上

二十餘章を増補せり。和上一代の

法語慈訓人も悉く一讀その慈誨に浴せん

旭 意恩師說教 山口氏筆記

一種 深信說教

實價金參拾錢 郵税金六錢

本書 青年學生教員 諸氏の請によ

深信の御文を標準とし 常流安心の要領

を説き明し、其形式を異教材の如譬喩の

從來の説教と、實感的の應用せられ

佐藤巖英師述 ●最新刊

讚歎異鈔講話

言文一致 實價六拾五錢 小包八錢

昨年北海道講習會 一は信仰鼓吹、二は教

材提供を以て親鸞聖人の御信仰

絕對他力の根本義を眞俗二諦に

て實例を擧げ事實を現代の求道者に

眞宗の妙味を了解する様平易に實

文學博士井上哲次郎氏序説 佐藤巖英師述

二宮尊徳翁と佛教

●第五版 金五拾錢 小包八錢

二宮尊徳翁の報徳主義と大乘佛教の教理

と、翁の終始一貫、實互に經緯して、實に農會に

是れしもの、現代農本國たる帝國國民を教

養ふ無二の福音なり。

院書教興

ル上通前御路小油市都京
一八一〇一四
五一一一四
三一一一四

兌發

近 角 常 觀 著

訂正
補増

信仰之餘瀝

版貳拾第
袖珍美本
定價卅錢
郵稅四錢

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ後に著者が信仰の根柢を告白して、附録として「予が信仰的實驗」なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根柢は本書に於て明かならん。

懺悔錄 附録「歎異鈔」

版八第
袖珍美本
定價二十錢
郵稅四錢

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の意義を闡明せんが爲めに撰述したるものにして、著者は先づ自己の経験に筆を起し、人生の半以上義胸中に積蓄して寸時も止まざりし煩悶の實狀と服後に佛陀攝取の慈光に接しての悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を待給へる某氏の實例に見、人間何人城の如く來慈光の下唯救濟の一道ある所以を可憫切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。

人生と信仰

版五第
袖珍美本
定價卅錢
郵稅四錢

- ◎第一章 人生問題と信仰
- ◎第二章 悲觀思想と信仰
- ◎第三章 倫理力行と信仰
- ◎第四章 犯罪心理と信仰
- ◎第五章 社會問題と信仰
- ◎第六章 國家秩序と信仰
- ◎第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の問題は法律的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。觸り信仰により人生の根本的に自覺して、若しくは初めて解脱せる眞人生に入る事待ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

以上の三書是非どなたも読んで下さい

發 賣 所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求 道 發 行 所